

渡 橋 沖 遺 跡

(WATARIHASIOKI—ISEKI)

一般国道9号出雲バイパス建設予定地内
埋 藏 文 化 財 発 掘 調 査 報 告 3

1999年3月

建設省松江国道工事事務所
島根県教育委員会

渡 橋 沖 遺 跡

(WATARIHASIOKI—ISEKI)

一般国道9号出雲バイパス建設予定地内
埋 藏 文 化 財 発 掘 調 査 報 告 3

1999年3月

建設省松江国道工事事務所
島根県教育委員会



渡橋沖遺跡空中撮影合成写真



石製五輪小塔
22-13・14



中世土師器 陶器



漆器 29-8



22-1



22-3



22-2

青磁

序

一般国道9号は、京都市を起点として山陰地方の主要都市を結び、山口県下関市に至る総延長約690キロメートルの主要幹線道路です。

建設省松江国道工事事務所においては、出雲市内的一般国道9号の慢性的な交通渋滞を緩和して、円滑な交通を確保し地域社会の発展に資するため、出雲バイパスの建設を進めています。

道路整備に際しては、埋蔵文化財の保護にも十分留意しつつ関係機関と協議しながら進めていますが、回避することのできない埋蔵文化財については、道路事業者の負担によって、必要な調査を実施し、記録保存を行なっています。

出雲バイパスにおいても、道路予定地内にある埋蔵文化財について島根県教育委員会と協議し、同教育委員会の協力のもとに平成8年度から発掘調査を行なっています。

本報告書は、平成9年度、10年度に実施した渡橋沖遺跡調査の成果をとりまとめたものであります。本書が郷土の埋蔵文化財に関する貴重な資料として、学術ならびに教育のため広く活用されることを期待するとともに、道路事業が文化財の保護にも十分留意しつつ進められていることへのご理解を頂きたいと思うものであります。

最後に、今回の発掘調査及び本書の編集に当たり、ご尽力いただいた島根県教育委員会ならびに関係各位に対し、深堪なる謝意を表すものであります。

平成11年3月

建設省中国地方建設局松江国道工事事務所

所長 大石 龍太郎

序

島根県教育委員会では、建設省中国地方建設局の委託を受けて、平成8年度から出雲バイパス建設予定地内遺跡の発掘調査を行なっております。この報告書は、平成9年度と平成10年度に実施した渡橋沖遺跡の調査成果を取りまとめたものです。

出雲バイパスの建設が進められている出雲市周辺は、原始・古代から文化が栄えた地域であり、多くの遺跡が確認されています。今回、調査を実施しました遺跡からは中世の掘立柱建物跡、溝跡、土坑などの遺構が検出されました。また、これらの遺構とともに石製五輪小塔、建材、下駄、道具、装飾品、生活雑器などの木製品や輸入陶磁器、国産陶器の甕壺類、土師器の供膳具、調理用具などの中世の遺物が出土しました。

こうした発掘調査の成果は、同じ出雲バイパス建設予定地内の姫原西遺跡、藏小路西遺跡など四絡遺跡群の調査成果とあいまって、出雲市域、ひいては島根県の歴史の解明に役立つものと思われます。また、本書が郷土の歴史と埋蔵文化財に対する理解と関心を高める一助となれば幸いです。

最後になりましたが、本書を刊行するにあたり、ご尽力いただきました建設省中国地方建設局、松江国道工事事務所、また、ご協力いただきました地元の皆様、ならびに出雲市教育委員会をはじめとする関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成11年3月

島根県教育委員会教育長

江 口 博 晴

例 言

1. 本書は建設省中国地方建設局の委託を受けて、島根県教育委員会が平成9年度と平成10年度に実施した、一般国道9号出雲バイパス建設予定地内遺跡「渡橋沖遺跡」（島根県出雲市渡橋町）の発掘調査報告書である。
2. 調査主体は島根県教育委員会であり、調査組織・体制は以下のとおりであった。

平成9年度	島根県教育庁文化財課	勝部 昭（課長）	島地徳郎（課長補佐）			
事務局	島根県埋蔵文化財調査センター	宍道正年（センター長）	占崎藏治（課長補佐）			
	瀧谷昌宏（企画調整係主事）					
調査員	島根県埋蔵文化財調査センター	調査第5係	足立克己（調査第5係長）			
	大庭俊次（文化財保護主事）	後藤達夫（教諭兼主事）	月坂雄一（臨時職員）			
	田中玲子（調査補助員）	ほかセンター職員				
調査指導	藤澤典彦（元興寺文化財研究所）	人文・考古研究室長				
平成10年度	島根県教育庁文化財課	勝部 昭（課長）	島地徳郎（課長補佐）			
事務局	島根県埋蔵文化財調査センター	宍道正年（センター長）	秋山 実（課長補佐）			
	松木岩雄（課長補佐）	川崎 崇（企画調整係主事）				
調査員	島根県埋蔵文化財調査センター	調査第3係	足立克己（主幹）			
	大庭俊次（文化財保護主事）	後藤達夫（教諭兼文化財保護主事）				
	田中玲子（調査補助員）	小田川悠美（調査補助員）				
遺物整理	平成9年度～平成10年度					
	江角シゲ子	大田晴美	金築郁子	西 郁子	原 昭枝	藤江美穂
3. 発掘作業（発掘作業員雇用等）については、建設省中国地方建設局、島根県教育委員会、中国建設弘済会の三者協定に基づき、島根県教育委員会から中国建設弘済会へ委託して実施した。平成9年度～平成10年度 社團法人 中国建設弘済会島根支部
- 技術員 布村幹夫 中島 勉 松近秀夫 事務員 須藤美奈子 篠原律子 飯塚春美
発掘作業員各位
4. 掘図中の方位は国土調査法による第 座標系の軸方位（西 磁北 $6^{\circ}50'$ - 真北 $-0^{\circ}26'55''$ - 座標北）を示し、レベル高は海拔高を示す。また、掘図の縮尺は図中に明示した。
5. 本書で使用した遺構記号はP-ピット、S-B-掘立柱建物跡、SK-土坑、SD-溝跡である。
6. 本書に掲載した遺物実測担当者 細木啓義 後藤達夫 田中玲子 小山川悠美
本書に掲載した掘図等写真担当者 小田川悠美 田中玲子 景山光子 瀬川恭子
7. 本書に掲載した遺構写真は、センター職員の協力を得て大半は大庭が撮影した。遺跡全体の空中撮影と写真合成はアジア航測に委託した。遺物写真は、石製五輪小塔の室内撮影（間野人丞）を除いて、すべて人庭が撮影した。なお、写真の縮尺は任意である。
8. 本書は足立、間野、人庭が執筆し、全体は大庭が編集した。
9. 本遺跡出土資料及び実測図、写真等の資料は、島根県埋蔵文化財調査センター（松江市打田町33番地）で保管している。

本文目次

第1章	調査に至る経緯	足立克己・大庭俊次	1
第2章	位置と環境・周辺の遺跡	間野大丞・大庭俊次	3
第3章	渡橋沖遺跡の調査成果	大庭俊次	7
第1節	発掘調査の経過と概要		7
第2節	検出された遺構・遺物		14
第3節	発掘調査成果のまとめ		53

図表目次

図1	一般国道9号出雲バイパス建設予定地と遺跡の位置関係	1
図2	四絡遺跡群と渡橋沖遺跡の位置関係	3
図3	渡橋沖遺跡周辺の遺跡位置図	5
図4	渡橋沖遺跡遺構位置図	8
図5	渡橋沖遺跡掘立柱建物の変遷 その1	10
図6	渡橋沖遺跡掘立柱建物の変遷 その2	12
図7	渡橋沖遺跡掘立柱建物の変遷 その3	13
図8	渡橋沖遺跡S B02遺構実測図	14
図9	渡橋沖遺跡S B11遺構実測図	15
図10	渡橋沖遺跡S B11遺構(断面)実測図	16
図11	渡橋沖遺跡S B21遺構実測図	17
図12	渡橋沖遺跡S B21遺構(断面)・遺物実測図	18
図13	渡橋沖遺跡S B12遺構実測図	19
図14	渡橋沖遺跡S B22遺構実測図	20
図15	渡橋沖遺跡S B23遺構実測図	21
図16	渡橋沖遺跡S B24遺構実測図	22
図17	渡橋沖遺跡S B01遺構実測図・出土錢貨拓影	23
図18	渡橋沖遺跡S B61遺構実測図	24
図19	渡橋沖遺跡S B61出土柱根実測図	25
図20	渡橋沖遺跡S B71遺構実測図	26

図 表 目 次

図21 渡橋沖遺跡溝跡土層断面図	27
図22 渡橋沖遺跡溝跡出土遺物実測図	28
図23 渡橋沖遺跡検出土坑位置図	29
図24 渡橋沖遺跡S K02遺構・出土上器実測図	30
図25 渡橋沖遺跡S K04遺構・遺物出土状況実測図	31
図26 渡橋沖遺跡S K04出土遺物実測図	32
図27 渡橋沖遺跡S K07遺構・出土土器実測図	33
図28 渡橋沖遺跡S K06遺構・遺物出土状況実測図	34
図29 渡橋沖遺跡S K06出土遺物実測図	35
図30 渡橋沖遺跡S K08遺構実測図	36
図31 渡橋沖遺跡S K09遺構・遺物出土状況実測図	37
図32 渡橋沖遺跡S K09遺物実測図	38
図33 渡橋沖遺跡S K10遺構・出土遺物実測図	39
図34 渡橋沖遺跡S K12・S K13遺構実測図	40
図35 渡橋沖遺跡S K21・S K24遺構・遺物出土状況実測図	41
図36 渡橋沖遺跡S K21出土遺物実測図	42
図37 渡橋沖遺跡S K22遺構・出土遺物実測図	43
図38 渡橋沖遺跡S K25遺構実測図	44
図39 渡橋沖遺跡S K28・S K29・S K30遺構実測図	45
図40 渡橋沖遺跡S K31遺構・遺物出土状況実測図	46
図41 渡橋沖遺跡S K31出土遺物実測図	47
図42 渡橋沖遺跡S K32遺構・遺物出土状況実測図	48
図43 渡橋沖遺跡S K32出土遺物実測図	49
図44 渡橋沖遺跡S K34・S K35遺構実測図	50
図45 渡橋沖遺跡S K37遺構・出土遺物実測図	51
図46 渡橋沖遺跡その他の遺構・出土遺物実測図	52
表1 周辺の遺跡一覧表	6

第1章 調査に至る経緯

一般国道9号は、昭和41年に1次改築を完了したが、その後の交通量の増加にともない、各所で交通渋滞が発生していた。特に出雲市内においては、近年の急速な都市化の進行で、朝夕はもとより、日中においても慢性的な渋滞を来すようになり、幹線道路としての機能が麻痺状態に陥っていた。出雲バイパスはこうした現状に対処するため、昭和55年と昭和58年に都市計画決定されたものである。当初は、起点を篠川郡斐川町併川、終点を出雲市高松町とした延長7.9kmの4車線道路として計画されたが、その後、斐川町内の混雑緩和を図るため、事業区間が斐川町富村まで、さらに、0.3km延伸されている。

こうした中で、埋蔵文化財との調整が具体化したのは、平成3年度のことであった。出雲市内の国道9号を所管する松江国道工事事務所は、平成3年9月24日付で島根県教育委員会に対し、出雲バイパス建設予定地内の遺跡の有無を照会してきた。これに対して島根県教育庁文化課（以下文化課）は、平成5年2月に予定地周辺の分布調査を実施し、出雲市姫原町上ノ島西遺跡、出雲市小山町戸小路西遺跡、出雲市渡橋町渡橋沖遺跡、出雲市天神町天神北本町遺跡、出雲市白枝町白枝遺跡の5遺跡を発見するとともに、要注意箇所4箇所をそれに追加して、平成5年3月31日付で遺跡の存在と文化財保護法上の諸手続並びに取扱について協議が必要な旨回答した。

ところで、この出雲バイパスが通過する出雲市街地は、出雲市が事業主体となって昭和62年度から実施している土地区画整理事業の対象地となっており、出雲バイパス建設も当然区画整理事業の計画の一部に組み込まれる形で設計されていた。これらの事業に加えて、さらに、かねてより県立

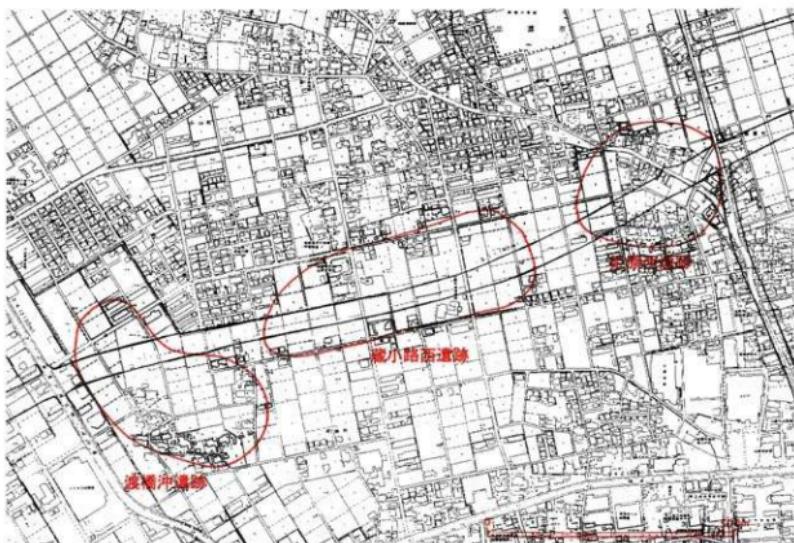


図1 一般国道9号出雲バイパス建設予定地と遺跡の位置関係 (S = 1/10,000)

病院の施設整備と充実を図ることを計画していた島根県健康福祉部が、同区域内、姫原町地内の出雲バイパス隣接地に県立中央病院の移転・新築を計画し、平成5年8月に埋蔵文化財調査の必要性について文化課に問い合わせてきた。文化課では同年2月の分布調査の結果を踏まえ、中央病院建設予定地内の試掘調査が必要な旨回答した。この中央病院の移転・新築は島根県の第2次中期計画の中でも最重要プロジェクトのひとつに挙がっており、平成11年開院に向け、埋蔵文化財との調整も緊急を要したが、一般国道9号安来道路や斐伊川放水路などの大規模開発事業に伴う埋蔵文化財調査に手を取られていた文化課ではこれに直接対応することができなかった。そのため、関係機関で協議した結果、出雲バイパス予定地も含め、土地区画整理事業の主体者である出雲市が、事業の一環として確認調査を行なうことになり、出雲市教育委員会が平成6年上ノ島西遺跡の確認調査を実施した。トレンチ調査の結果、造構・遺物は検出されず、県立中央病院建設予定地とその周辺については、平成7年に工事着手された。

土地区画整理事業内の工事に着手した松江国道工事事務所は、引き続き直轄事業となるその西方のルート1.4km区間について平成7年度からの調査着手を希望したが、協議を重ねた結果、平成7年度末から第一次調査に着手し、翌8年度から本格化させることで合意に達した。これにより、平成7年12月27日付で松江国道工事事務所から文化財保護法57条第3項の発掘届けが提出され、島根県教育厅文化財課（平成7年度島根県教育厅文化課改組）は、翌平成8年1月26日付で文化財保護法第98条第2項の発掘届けを提出するとともに、2月からルート東端の要注意箇所を皮切りに第一次調査に入った。

しかし、当初の埋蔵文化財の発掘調査計画は、様々な要因により数回にわたって変更を余儀なくされた。實際には、平成8年度に姫原西遺跡と藤小路西遺跡のそれぞれ一部を発掘調査、平成9年度に姫原西遺跡と藤小路西遺跡のそれぞれの残部と渡橋沖遺跡の一部の発掘調査を実施、渡橋沖遺跡の残部の発掘調査は平成10年度に行なうこととなった。

第2章 渡橋沖遺跡と周辺の遺跡

渡橋沖遺跡は出雲平野（簸川平野）のほぼ中央部、出雲市渡橋沖遺跡に所在する中世の遺跡である。遺跡の所在する出雲平野は北に島根半島、南に中国山地という山塊にはさまれており、中国山地に源を発する斐伊川・神戸川の二大河川の沖積作用によって形成された肥沃な平野である。渡橋沖遺跡は、弥生時代の拠点集落として著名な矢野遺跡を中核とする四絡遺跡群の南西縁に当たると考えられる^④。この地域の歴史的環境については、出雲市教育委員会編『遺跡が語る古代の出雲』に詳しいので参照されたい^⑤。

縄文時代 最も古い遺跡としては早期末の菱根遺跡(22)、上長浜日塚(107)がある。中期の遺跡は現在のところ知られていない。後期から晩期にかけての遺跡は、のちに「神戸水海」と呼ばれた潟湖の周辺部に多く分布している。また、山地と平野の境界に位置する三田谷I遺跡では、出雲平野で初めて三瓶降下火山灰と考古学的遺物との層位的関係をつかむことができた。今後の出雲平野における発掘調査で留意すべきキーポイントとなろう。さらに、平成9年度の出雲バイパス建設予定地内蔵小路西遺跡F1区の発掘調査で晩期末あるいは弥生時代早期とも言うべき時期の遺構・遺物が検出されている^⑥。

弥生時代 中期中頃になると、平野の微高地上にいくつかの集落遺跡群が形成され、展開していく。四絡遺跡群（2～7, 41）、吉志遺跡群（88, 95ほか）、天神遺跡群（86）などである。

こうした集落遺跡群の指導者として斐伊川左岸の丘陵上に西谷墳墓群（44）が築かれる。上記藏小

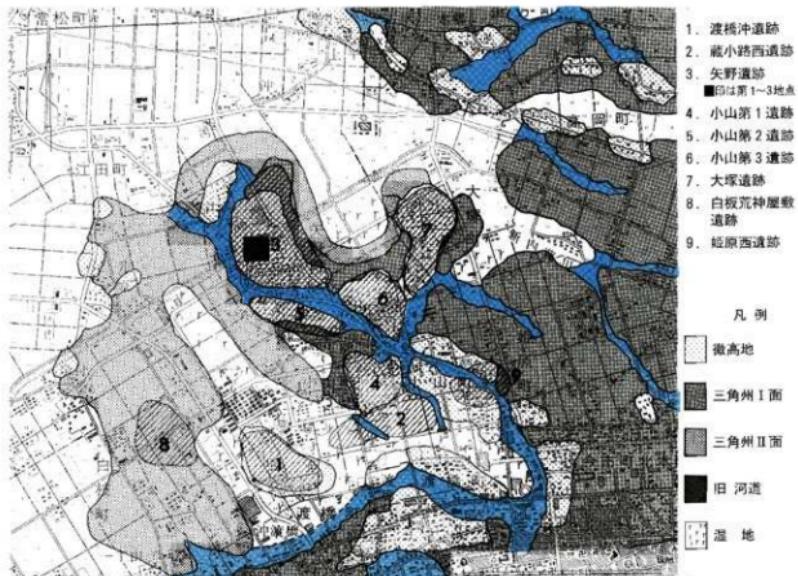


図2 四絡遺跡群と渡橋沖遺跡の位置関係 ($S = 1/25,000$)

路西遺跡の調査では弥生時代末から古墳時代初頭にかけて埋没した自然河道が隨所で検出された。また、この時期の遺構もいくつか検出されている。

古墳時代 この時代の象徴となる古墳については、出雲平野では、前半期のものは少ない。後期になると県下最大級の前方後円墳である今市大念寺古墳（57）や上塩冶築山古墳（70）の出雲西部最高首長累代の墓が築かれる。また、古墳時代後期には神戸川左岸に神門横穴墓群、右岸に上塩冶横穴墓群（81ほか）の二大横穴墓群が築造される。

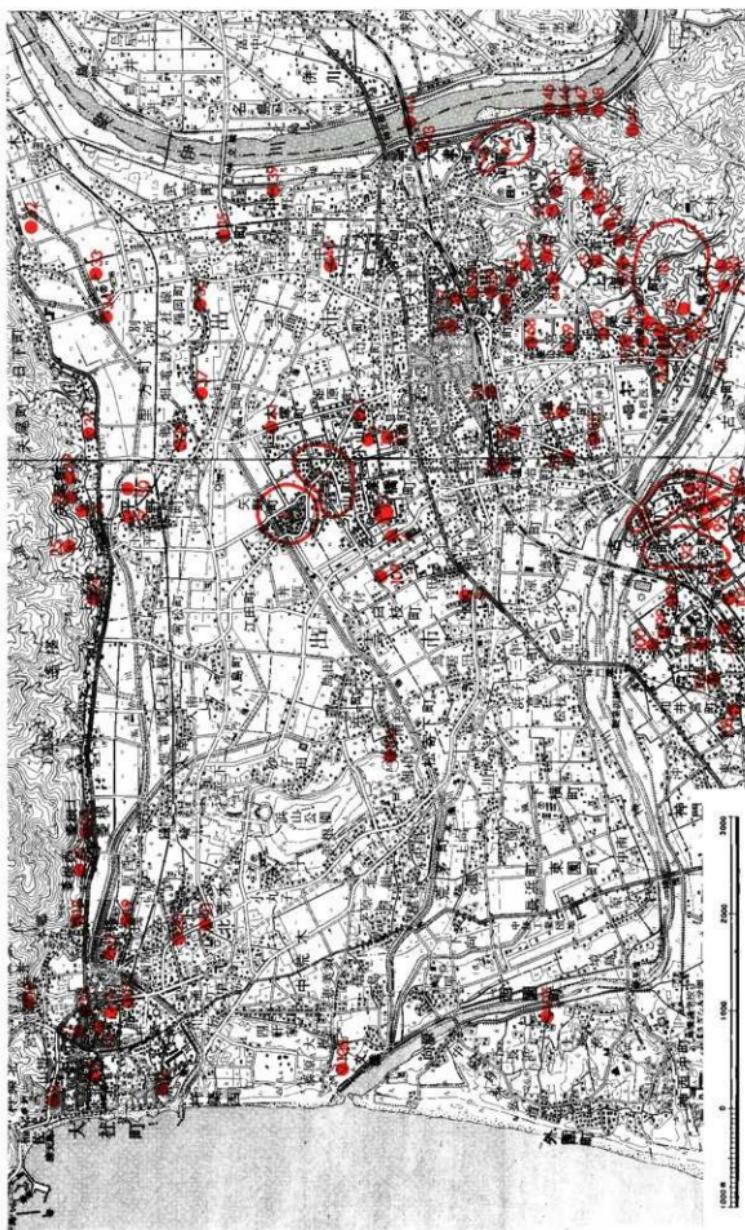
奈良・平安時代 『出雲国風土記』の記載と関連する遺跡が注目される。神門郡郡家と推定される古志本郷遺跡、天神遺跡のはか三田谷Ⅰ遺跡でも官衙関連の遺構、遺物が検出されている。このほか、古代寺院の遺跡としては神門寺境内廃寺（84）、長者原廃寺（51）があり、風土記記載の新造院に比定されている。この時代の古墓としては朝山古墓や小坂古墳で石櫃などが知られていたが、新たに光明寺3号墓（80）で墳丘に石櫃を内蔵した例が調査されている。

中世 半分城（73）、大井谷城（67）などの城郭や、犬神遺跡、矢野遺跡などで、溝で区画された屋敷跡が調査されている。一方、上長浜貝塚では、古代末から中世にかけての漁村の姿を知ることができる。また、中世の墓としては、竜泉窯系青磁が出土した荻籽古墓（35）が著名である。さらに近年、中世陶磁器の出土する遺跡の事例も増えている。上記藏小路西遺跡で中世朝山氏惣領家の居館跡と推定される館跡が検出されたほか、姫原西遺跡では木棺墓が調査され、渡橋沖遺跡においても当該期の屋敷地が検出されるなど、中世の出雲平野の景観を復元する上で多くの知見を得ることができた。

註

- (1) 出雲市教育委員会『遺跡が語る古代の出雲－出雲平野の遺跡を中心として－』1997年
- (2) 註(1)と同じ。なお、古地形、とくに斐伊川・神戸川と遺跡の立地については、次の2種の文献にコンパクトにまとめられている。
中村唯史「山持川川岸遺跡の古環境」「山持川川岸遺跡」出雲市教育委員会1996年
中村唯史「小山遺跡周辺の古地理に関するコメント」「小山遺跡第2地点発掘調査報告書」
出雲市教育委員会1998年
- (3) 島根県教育委員会『藏小路西遺跡－一般国道9号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告2－』1999年

図3 渡橋沖遭難周辺の遺跡位置図 ($S = 1/50,000$)



番号	遺跡名	種別	番号	遺跡名	種別
1	渡橋沖遺跡	集落跡	5 6	塚山古墳	古墳
2	藏小路西遺跡	館跡	5 7	大念寺古墳	古墳
3	姫原西遺跡	河川跡	5 8	樋野祐平窯跡	窯跡
4	天神北本町遺跡	散布地	5 9	平家丸城跡	城跡
5	白枝遺跡	散布地	6 0	久瀬園横穴墓	横穴墓
6	矢野遺跡	集落跡	6 1	下沢遺跡	散布地
7	小山遺跡	集落跡	6 2	向山城跡	城跡
8	仮ノ宮台場跡	台場跡	6 3	下沢古墳	古墳
9	智願寺古墓	古墓	6 4	下沢会館周辺遺跡	散布地
1 0	出雲大社境内遺跡	散布地	6 5	若沢古墳	古墳
1 1	越前焼窯跡	窯跡	6 6	狐通谷古墳	古墳
1 2	乗光寺跡	寺院跡	6 7	大井谷城跡	城跡
1 3	鹿藏山経塚	経塚	6 8	角田遺跡	散布地
1 4	鹿藏山塹跡	城跡	6 9	宮松遺跡	集落跡
1 5	鹿藏山遺跡	貝塚	7 0	上塙治築山古墳	旗・旗・旗
1 6	赤塚台場跡	台場跡	7 1	寿昌寺遺跡	散布地
1 7	乙見焼窯跡	窯跡	7 2	地藏山古墳	古墳・散布地
1 8	修理免本郷遺跡	散布地	7 3	半分城跡	城跡
1 9	原山遺跡	散布地	7 4	半分瓦窯跡	窯跡
2 0	南原遺跡	散布地	7 5	半分古墳	古墳・散布地
2 1	中分貝塚	貝塚	7 6	出雲工業西遺跡	散布地
2 2	菱根遺跡	散布地	7 7	三田谷 I 遺跡	集落跡 他
2 3	西組古墳群	古墳・闕屋跡	7 8	三田谷 II 遺跡	古墳 他
2 4	亀谷遺跡	散布地・古墳	7 9	光明寺南古墳	古墳
2 5	蛇山砦跡	城跡	8 0	光明寺古墳群	古墳群
2 6	石臼古墳	古墳	8 1	上塙治横穴墓群	横穴墓群(36支)
2 7	高浜 II 遺跡	散布地	8 2	渡瀬遺跡	散布地
2 8	大前山古墳	古墳	8 3	高西遺跡	散布地・館跡
2 9	熊見谷遺跡	散布地	8 4	神門寺境内廃寺	寺院跡・散布地
3 0	里方八石原遺跡	散布地	8 5	塩治小学校付近遺跡	散布地
3 1	前口遺跡	散布地	8 6	天神遺跡	集落跡
3 2	龍前寺東遺跡	散布地	8 7	弓原遺跡	散布地
3 3	山持川川岸遺跡	散布地	8 8	古志本郷遺跡	集落跡
3 4	里方別所遺跡	散布地	8 9	大堤古墳	古墳
3 5	荻籽古墓	古墓	9 0	恩柵橋北遺跡	散布地
3 6	稻岡遺跡	散布地	9 1	古志遺跡	散布地
3 7	高岡遺跡	散布地	9 2	放れ山古墳	旗・旗・旗
3 8	高浜 I 遺跡	散布地	9 3	下古志遺跡	集落跡
3 9	荻籽遺跡	古墓	9 4	善行寺遺跡	集落跡
4 0	太歳遺跡	散布地	9 5	田畠遺跡	集落跡
4 1	大塚遺跡	散布地・古墓	9 6	妙蓮寺山古墳	古墳
4 2	斐伊川鉄橋遺跡	散布地	9 7	宝塚古墳	古墳
4 3	石土手遺跡	散布地	9 8	古志天満宮付近遺跡	散布地
4 4	西谷塙群	塙群	9 9	阿弥陀寺西遺跡	散布地
4 5	来原岩桶跡	水路跡	1 0 0	極楽寺付近遺跡	散布地
4 6	長廻横穴墓	横穴墓	1 0 1	東原遺跡	散布地
4 7	長廻遺跡	散布地	1 0 2	芦渡遺跡	散布地
4 8	権現山古墳	古墳	1 0 3	天神原古墳	古墳
4 9	権現山横穴墓群	横穴墓群	1 0 4	知井宮多聞院遺跡	集落跡
5 0	間府岩桶跡	水路跡	1 0 5	觀音寺付近遺跡	散布地
5 1	長者原廃寺	寺院跡	1 0 6	馬見烽跡	烽跡
5 2	皆沢古墓	古墓	1 0 7	上長浜貝塚	貝塚
5 3	上沢 I 遺跡	散布地	1 0 8	湊原台場跡	台場跡
5 4	上沢 II 遺跡	散布地	1 0 9	白枝荒神遺跡	散布地
5 5	上沢 III 遺跡	散布地			

表1 周辺の遺跡一覧表

第3章 渡橋沖遺跡の調査成果

第1節 発掘調査の経過と概要

渡橋沖遺跡の発掘調査は、平成8年度末の一次調査を手始めに、平成9年度及び10年度の2回に分けて二次調査を実施した。

調査対象区域について

平成9年度は、一次調査で遺構の存在が予測された範囲のうち、建設省との協議で限定された区域での調査となった。すなわち、遺跡範囲内の出雲バイパス建設予定地内を南北に貫く細い排水路をはさんで、東は、畑の区画に沿った21mあまりの区域、西は、やはり南北に走る市道までの区域である。

平成10年度の発掘調査対象区域は、平成9年度調査区をはさんで、東は、やはり、これも建設予定地内を南北に貫く市道までの50mあまりと、西は、主要地方道出雲・大社線に並行する排水路までの区域を調査対象とした。

土地利用状況について

渡橋沖遺跡の出雲バイパス建設予定地内における近年の土地利用状況は、次のようにあった。

前段に記した西側の市道から主要地方道出雲・大社線に並行する排水路までの部分は、ほぼ全面、水田として利用されていた。田面の標高は、4.0mを測る。この市道から、平成9年度調査区を南北に流れる排水路までの部分は、建設予定地内の真中を、東西に畠地が横たわっており、これを中心に、南北の水田を切り取る形で用地を買収した形となっていた。したがって、この部分の調査区は、南北に3等分する形で、水田～畠～水田となっていた。排水路から東の遺跡内は、ほとんどの部分が畠地として利用されており、おもに、桑畠とビニールハウスとして利用されていた。平成9年度調査区の水田面は南北とも、ほぼ標高4.0m前後。真中の畠地は嵩上げされており標高4.4m前後。このほか、桑畠やビニールハウスとして利用されていた部分は標高4.2～4.4mを測る。また、平成9年度調査区において、細い排水路より東側の部分の北側にあった畠地はやや高く、標高4.6mを測る。

なお、遺跡の空中撮影合成写真の、平成9年度調査区東側から平成10年度調査区にかけての部分で、東西に点々と規則正しく並び、白く輝いてみえる四角い物体の列は、遺構ではなく、ビニールハウスを押さえるために埋め込まれたコンクリートブロックの列である。

また、後に検出して、SB11とした掘立柱建物跡やSD05とした溝跡の南側にあたる部分は、構造物の基礎コンクリートが地下数メートルまで及んで攪乱されていたため、調査対象から外した。

調査区内の土層堆積と遺構分布状況について

平成9年度西側調査区の西側部分から南側にかけての部分は、耕作土と床土を除去すると、基本的に砂地となり、この概ね暗黄褐色の砂層から溝跡、柱穴、土坑などの遺構が中世の遺物とともに検出された。西側調査区の北東から、東側調査区のほかの部分にかけては、このような砂地に至るまでに、レンズ状に、黄色ないしは灰白色の粘質土層がはさまっているようすが検出された。このような粘質土層が検出される傾向は、平成10年度調査区内のE区西側にも続いており、建設予定地内の南北幅を越えて、北西から南東にかけて粘質土層の帯が横たわっているようである。この部分

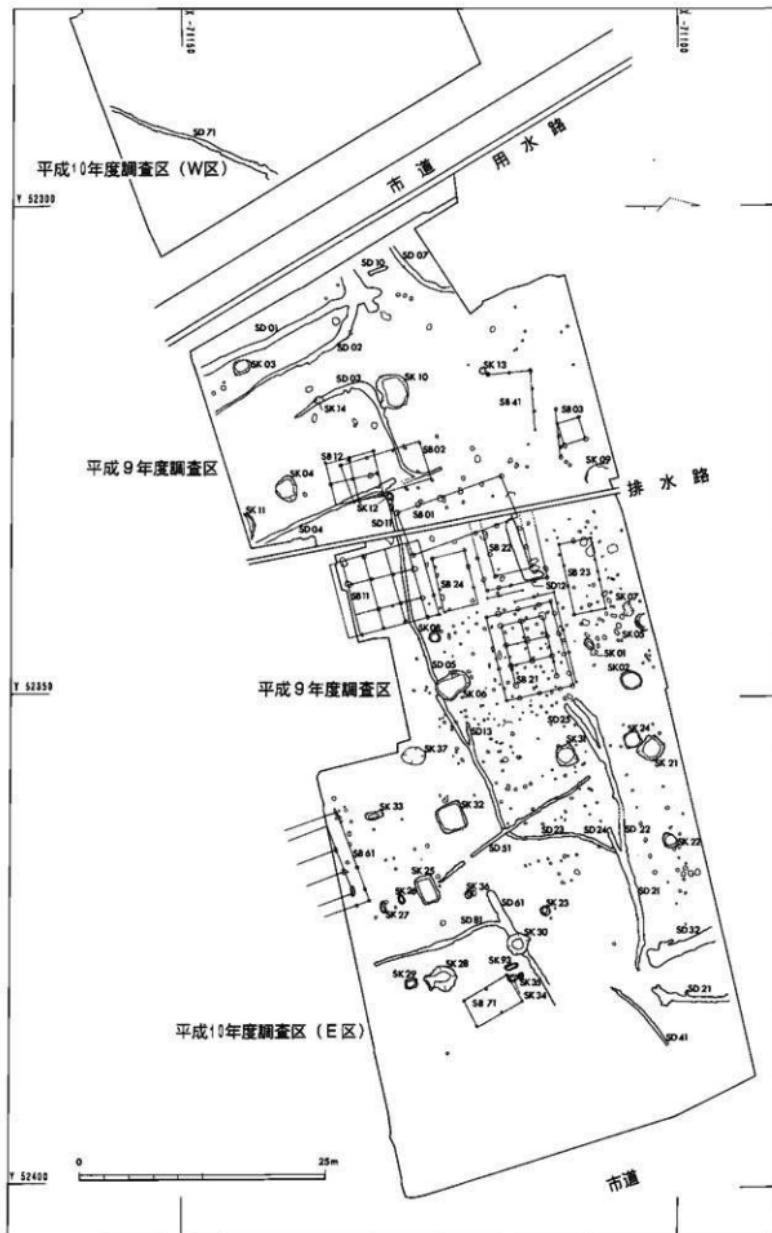


図4 渡橋沖遺跡遺構位置図 ($S = 1/500$)

から東側のE区は、また、砂地の区域となり、さらに、東に進んで東側の市道に近い部分になると、また、同様の粘質土層が表れてくる。このような土質の傾向は、発掘による削り込みで、粘質土の喪失はあるものの、空中撮影合成写真に見て取れる。

この砂地は深く、全面にわたっていた。さらに、地下の標高3m付近では、伏流水が勢い良く流れしており、すべての上坑の掘り込みがこの伏流水の水脈にあたっていた。一次調査時においても、以下の砂層から遺物を検出することがなかったため、調査対象外とした。

蛇足ながら、砂地といい、黄色・灰白色粘質土層といい、建物を建てる地盤としてはすこぶる脆弱であるように思われた。

遺構の分布状況についてであるが、平成9年度調査区西側の北東半分、東側の大部分、及び平成10年度調査区E区のこの粘質土層の分布域には、砂地部分とにまたがって、別け隔てなく遺構が掘り込まれている部分がある。たとえば、後に述べる、SB11やSB21などは、上質の違いをものともせず、両者を跨いで、規格的で調査区内最大の建造物を建てている。しかし、E区においては、砂地から東側の遺構密度は平成10年度W区の砂地と同様に減っていき、溝跡のみとなる。

調査区内の建物遺構の分布は、東西の砂地部分にはさまれた、レンズ状の黄色ないし灰白色の粘質土層部分の、平成9年度東側調査区を中心とする区域に限定される傾向がある。

平成9年度の発掘調査の経過と概要について

発掘調査は、平成9年6月18日から、断続的に重機による表上掘削を開始した。調査現場の電気設備工事など必要な設備を整え、7月14日から、人力による遺構検出のための荒掘りや、遺構精査の作業を本格的に開始した。荒掘りや土層観察を通じて遺構のようすを確認していくと、掘立柱建物跡、上坑、溝跡などの遺構が重なり合っているようですが、口を追って明らかになってきた。

さらに、遺構精査を進めると、前項で触れたSB11やSB21とSB01とした掘立柱建物跡は、掘り込んだ柱穴の中に、根石や板を据えているものが多く検出されて特徴的に思われた。脆弱な地盤に建造物を建てるにあたっての工夫の一つであろうか。これらの遺構にともなって出土した遺物の多くは、中世土師器やその破片であった。さらに、これらの遺構の検査・精査を進めると、伏流水の水脈にあたる土坑などからは、木製品なども出土するようになった。また、SD05と名付けた溝跡に堆積する灰黒色土層中からは、青磁碗の破片が出土して、遺構の時期を考えるにあたり、おおいに参考になると思われた。

このように、遺構の検査・精査と土器の取り上げなどの作業を進めながら、遺構や遺物出土状況の実測、写真撮影などを重ねるうちに、8月27日に、SD01とSD02の合流付近の灰黒色土層中から、凝灰岩製の五輪小塔の出土を見るに至った。このような石製の五輪小塔の出土例は希少であったことから、急速、この時点までの渡橋沖遺跡や周辺の遺跡の発掘調査成果と、五輪小塔に関わる情報をまとめて、報道機関に提供した。

その後も発掘調査の種々の作業を続け、渡橋沖遺跡の平成9年度調査区内の全容が、ほぼ明らかになった9月27日に、近隣の住民や関係各位に事前に告知して、出雲バイパス建設予定地内遺跡発掘調査全般にわたる現地説明会を開催した。遺跡現場の説明は渡橋沖遺跡のみとして、遺物の紹介は、整理の進んだ蔵小路西遺跡や姫原西遺跡の遺物を中心に公開した。遺跡現地の説明にあたっては、遺構の規模、掘立柱建物跡の構造的特徴などを体感してもらえるように配慮して、参加者を発掘調査現場内に誘導した。出土遺物の公開については、写真、イラストなどの解説パネルを作り、

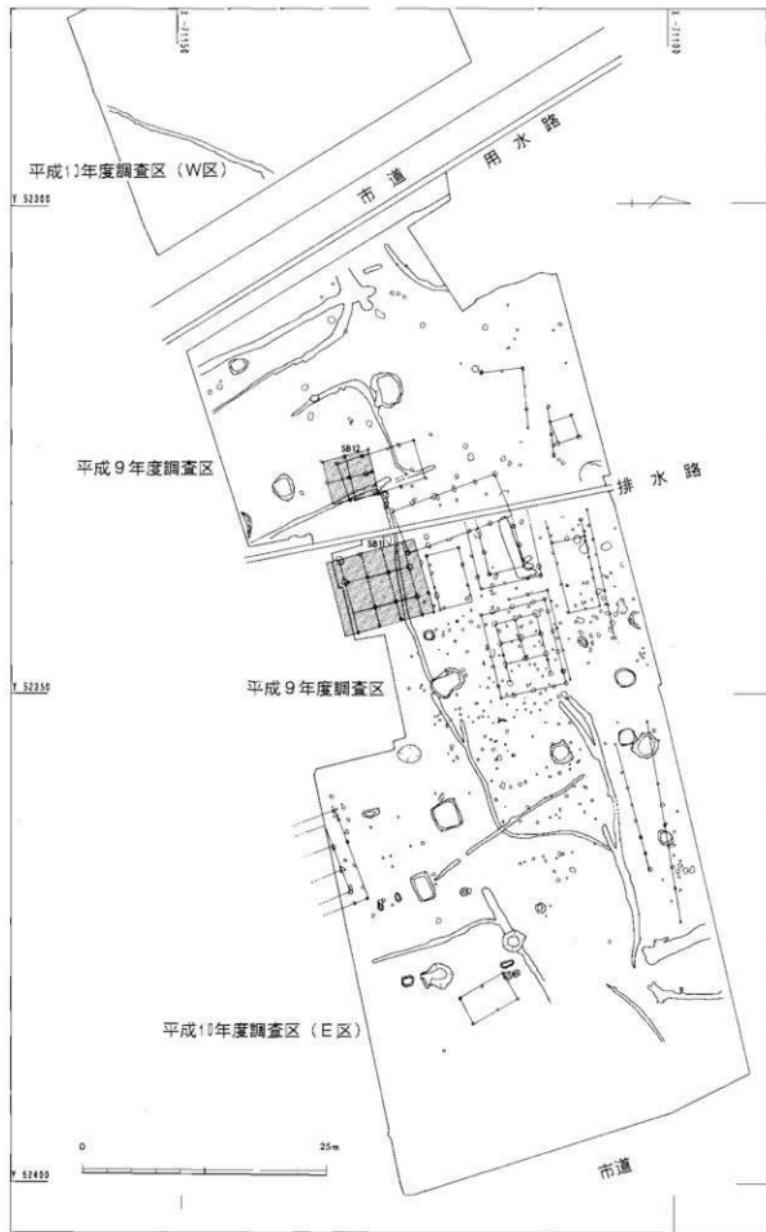


図5 渡橋沖遺跡掘立柱建物の変遷 その1 (S = 1/500)

要所に人員を配置して説明等にあたらせた。参加者は100人前後で、報道関係の取材も数社に及んだ。

この後、10月1日に、渡橋沖遺跡の平成9年度調査区の空中撮影を行なった。撮影にあたっては、翌年の発掘調査が想定される部分と合成できるように配慮して行なった。

さらに、遺構実測などの作業を進め、現場を撤退するための種々の作業を経て、10月20日に、平成9年度における渡橋沖遺跡の調査を終了した。

平成9年度の発掘調査で検出した遺構は、建物跡の柱穴やその他の構造物に伴う柱穴、ピットなどが500穴足らず、土坑が14基、溝跡が11条などであった。これにともなって出土した遺物の多くは破片を中心とした中世土器器皿類で、コンテナ（縦340mm、横540mm、高さ148mm、約27ℓ）14箱であった。このほかに、輸入青磁器皿類、国産陶器甕壺類、調理具類、木製品の食器類（漆器、曲げ物の底、匙、箸）、装身具類（櫛）、道具類（刃物の柄）、建築部材（柱根、礎板）などが出土している。

平成10年度の発掘調査の経過と概要について

平成10年度の発掘調査は、4月15日から、前年と同様に、桑畑やビニールハウスとして利用されていた部分の耕作土や床土を除去して開始された。荒掘りや遺構検出の作業を進めていくと、調査区の北側に、平成9年度調査区から続く溝跡が、東西に分岐、あるいは、集約しながら展開していくようすが浮かび上がってきた。また、平成9年度調査区に近い区域や北側に偏って、ピットや柱穴が多く検出されたが、これらは、平成9年度調査区のように、規格的な建物を構成するようには見えなかつた。しかし、ある程度規格的な配列も見られ、平成9年度東側調査区建物跡の一部と軌跡が共通する柱穴等もあるように思われた。このほかには、比較的大きな土坑が検出される傾向にあった。これらはすべて、その痕跡が、地下の標高3m付近の伏流水に到達しており、最低部を検出するのに難渋した。掘り上げた後は、崩落の危険があるため、記録を採ってすぐに土蓋で穴埋めした。平成9年度の発掘調査についても同様に処置しており、空中撮影合成写真の、白く輝く丸い部分はすべて、土坑を発掘調査して埋め戻した跡である。

平成10年度調査の重要な成果として、調査区南側で、後に検出してSB61とした掘立柱建物跡の検出が挙げられる。この、おそらくは縁付きの建物跡は、遺構の北端が調査区内にかかっているものと見られるが、これによって南側の用地外に比較的大型で規格的な遺構の続きのあることが容易に想定できる。このSB61を検出したことによって、平成9年度調査において、構造物の基礎に擾乱されていたため調査対象外とし、不明だった調査区の南側部分に、遺構の続きの、それも重要な部分があることが明らかになったといえる。

調査は6月25日に、空中撮影を行ない、その後、残った遺構実測や測量作業をして、7月3日に終了した。

検出した遺構は、掘立柱建物跡2棟、柱穴等140穴足らず、土坑17基、溝跡9条などであった。これらの遺構にともなって出土した遺物は、多くは破片を中心とした中世土器器皿類で、コンテナ（縦340mm、横540mm、高さ148mm、約27ℓ）14箱であった。このほかには、いずれも破片で、輸入青磁器皿類、国産陶器甕壺類、調理具類、木製品の建築部材（柱根、礎板）、差歎下駄の台部などが出土している。両年度の遺物とも13世紀を中心とする鎌倉時代のものが大半で、若干前後する時期のものと近世の陶磁器などが含まれる。

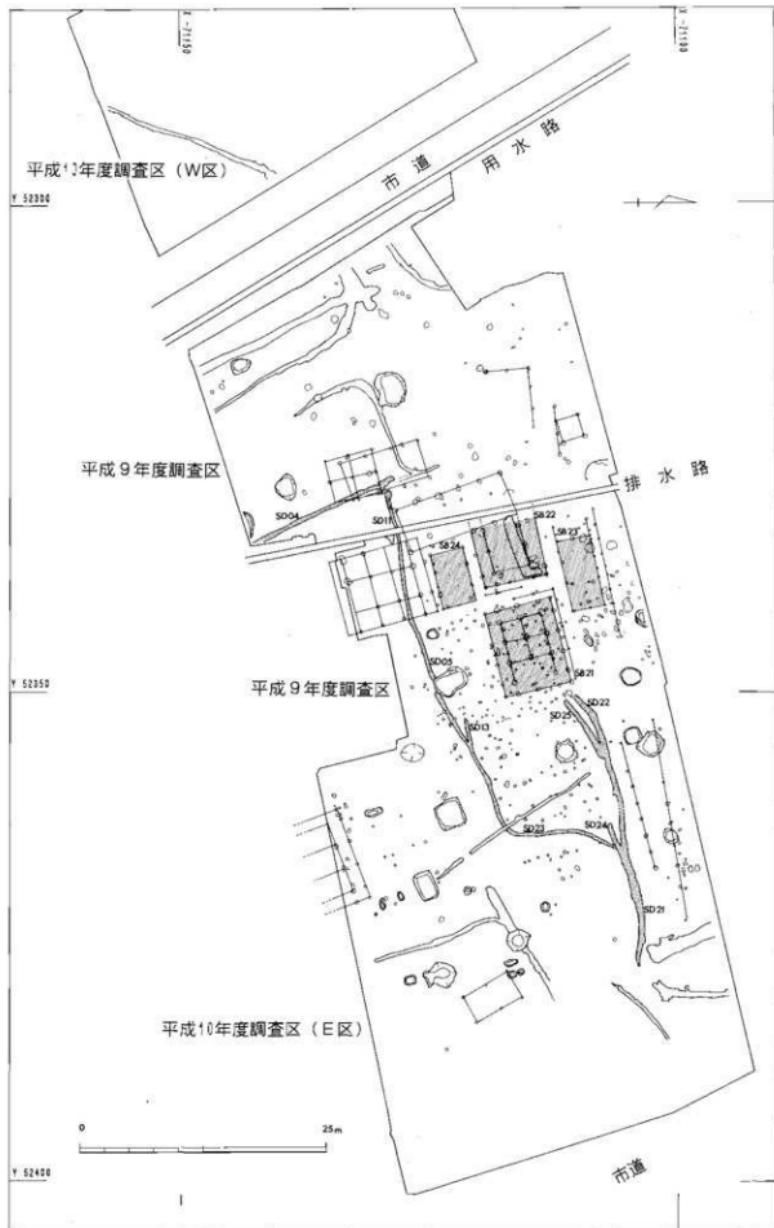


図6 渡橋沖遺跡掘立柱建物の変遷 その2 (S = 1/500)

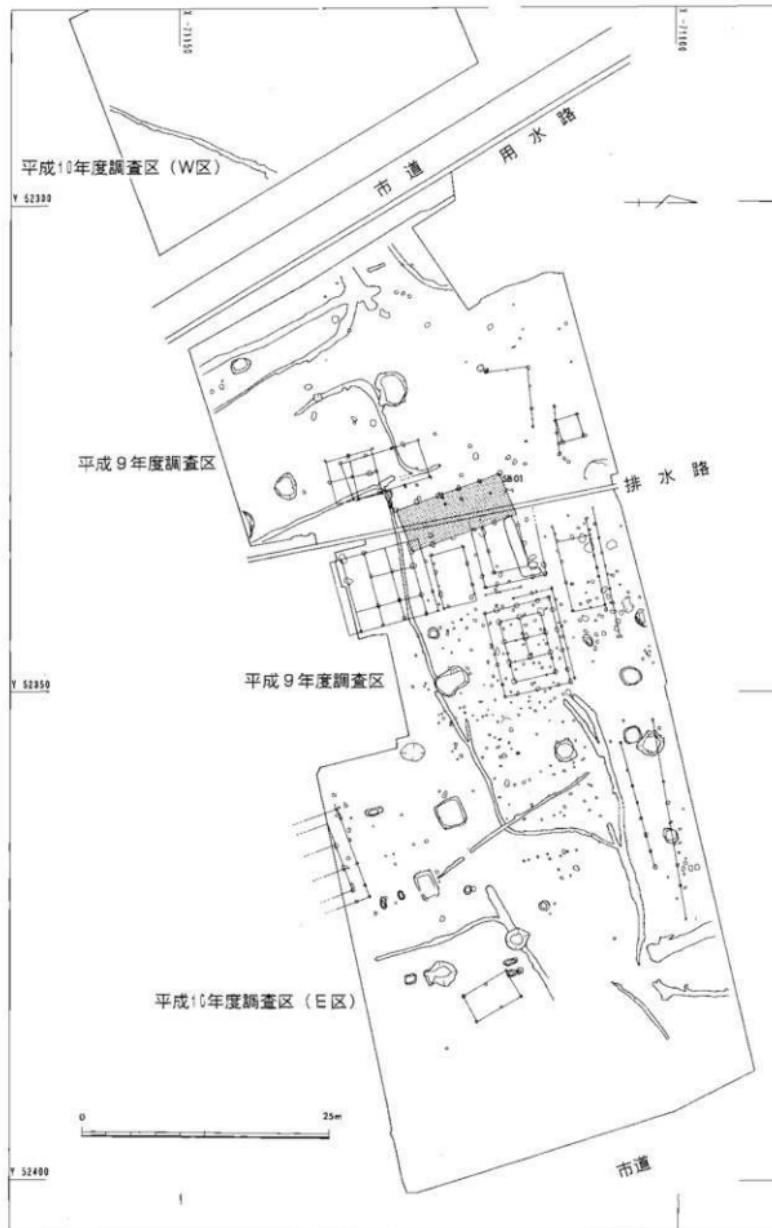


図7 渡橋沖遺跡掘立柱建物の変遷 その3 ($S = 1/500$)

第2節 検出された遺構・遺物

渡橋沖遺跡では、掘立柱建物跡12棟、溝跡18条、土坑31基などが検出された。これらの遺構を中心には、遺構に伴う遺物その他の中出土遺物などについて若干の記述を試みる。

掘立柱建物跡について

遺構の分布を見ると、やはり掘立柱建物跡がその中心をなしており、溝も土坑も掘立柱建物に規制されて配置が決められているようですがうかがえる。(図4) 平成9年度調査区の排水路をはさんだ部分は最も頻繁に建物の建て替えが行なわれたようであり、少なくとも3回確認できる。また、掘立柱建物跡のいくつかは

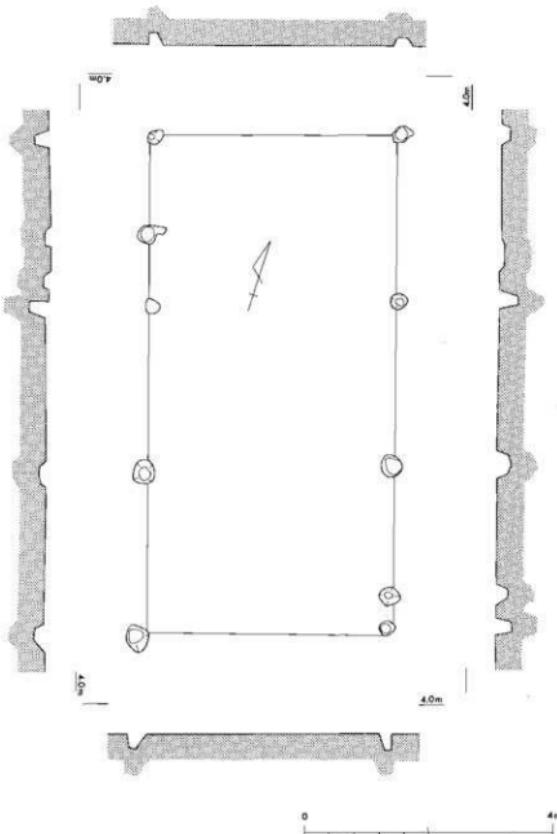


図8 渡橋沖遺跡S B02遺構実測図 (S = 1/80)

同軸であったりして同時期に機能していた可能性も指摘できる。これらのことから、掘立柱建物跡を4群に分けて考えたい。第1群はSD04とSD05の溝跡を跨いで検出したSB11とSB12である(図5)。第2群はSB21からSB24までの掘立柱建物跡である(図6)。この4棟は建物の長軸を一にしており、建物どうしの間隔も遠からず近からず、最も整美で堅牢そうに見えるSB21を中心に、同時に機能していた可能性がある。第3群は第2群のSB22とSB24を切って建てられた形跡のあるSB01である(図7)。建物を建て替えた順序は第1群→第2群→第3群とみることができ。第3群は第2群を切っており、第2群にSD04からSD21までの東西方向の溝跡がこれに付くとすれば、SB12の柱穴を切っているので第2群が優先するからである。

第4群は第1群から第3群までと重み合わない建物跡である。この第4群に含めたSB02(図8)

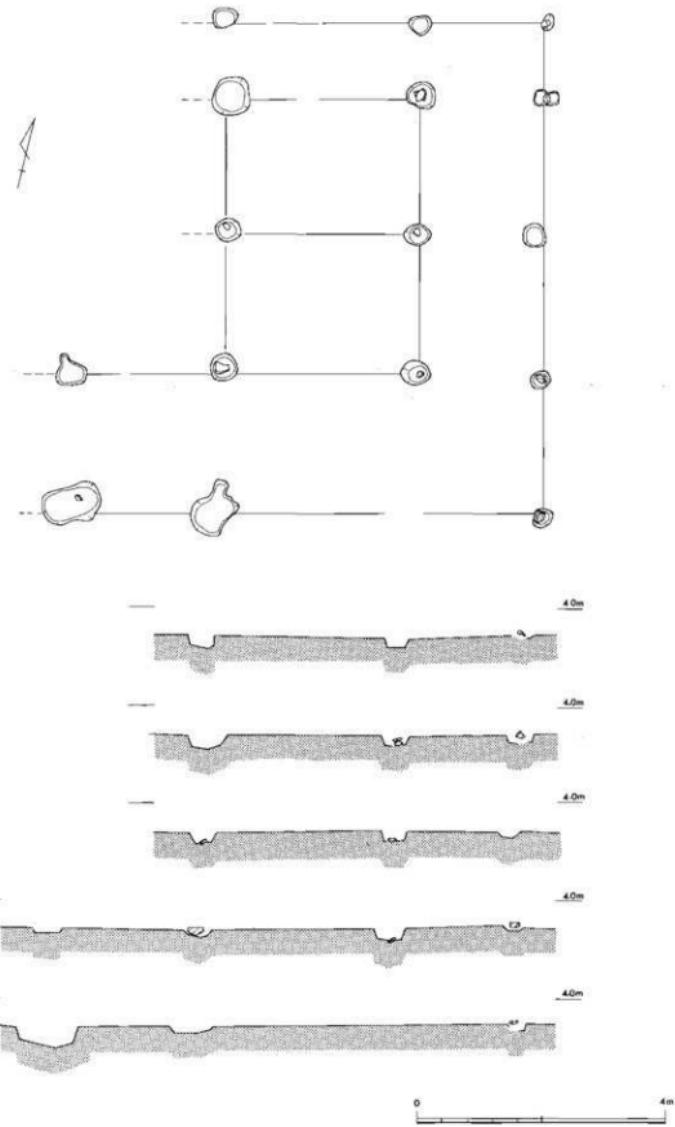


図9 渡橋跡 S B11 遺構実測図 ($S = 1/80$)

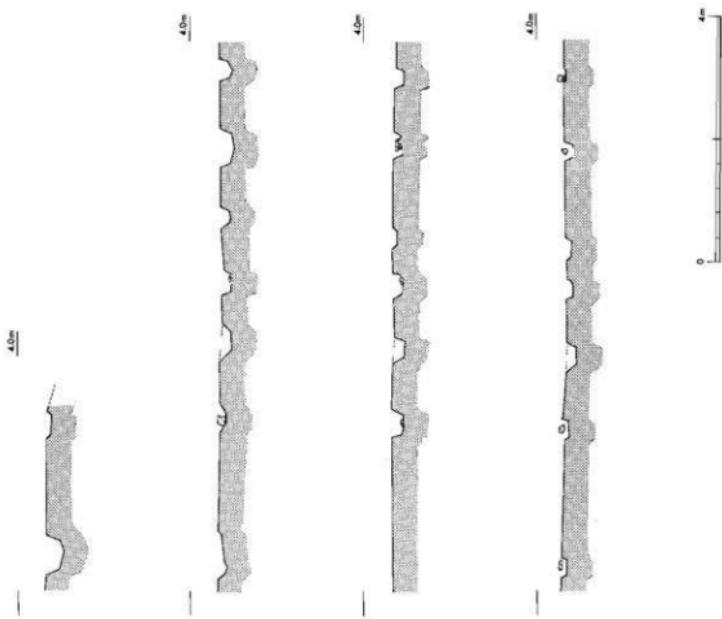


図10 渡橋沖遺跡 S B11 遺構実測図 ($S = 1/80$)

は砂質土壌に建てられた1間×3間の掘立柱建物跡である。遺物は得られていない。しかし、このS B02は溝跡やS B12などと絡んでいるのでこれらの建物跡の中で最古である可能性もある。

第1群としたS B11(図9・10)は、S B01と排水路に切られており、全体の規模と構造は不明、南北8m、東西7.5mにわたって建物を構成していた16の柱穴を検出した。この柱穴のうち9穴からは根石が、図9平面図の右隅の柱穴からは丸太を縦に割って平面を上に向かた状態で板が出土した(巻末写真図版10 S B11 356)。S B11の根石・根板は、後述するS B21やS B11のように多くの柱穴に穴一杯にしっかりととした根石が座っているという様相ではなく、穴の大きさに比べて小さいものであった。S B11からはこのほかの遺物は出土していない。

S B12(図13)もS D04・S D05に切られており、S B11とはほぼ同軸なので第1群と考えたい。この掘立柱建物跡は、S B02の遺構とも交錯しており、同じように砂質土をものもせず2間×2間の総柱の建物を建てていたと見られる。柱間は2.3m～2.5mを測る。S B11に見られたような根石などの構造は検出されなかった。

しかし、遺物としては土師器坏が1個体分出土している(図12-1)。出土位置は図13、平面図左中、補助線上の柱穴中である。この土師器坏は口径12cm、底径5.4cmで全体に暗いオレンジ色を呈している。口径に比べて底径が広く見え、浅い感じを受ける。体部の形状は、腰部で若干丸みを帯びるがそれから上には斜め上方にまっすぐ伸び、口縁端部は角ばっている。鳥根中世Ⅲ期^①

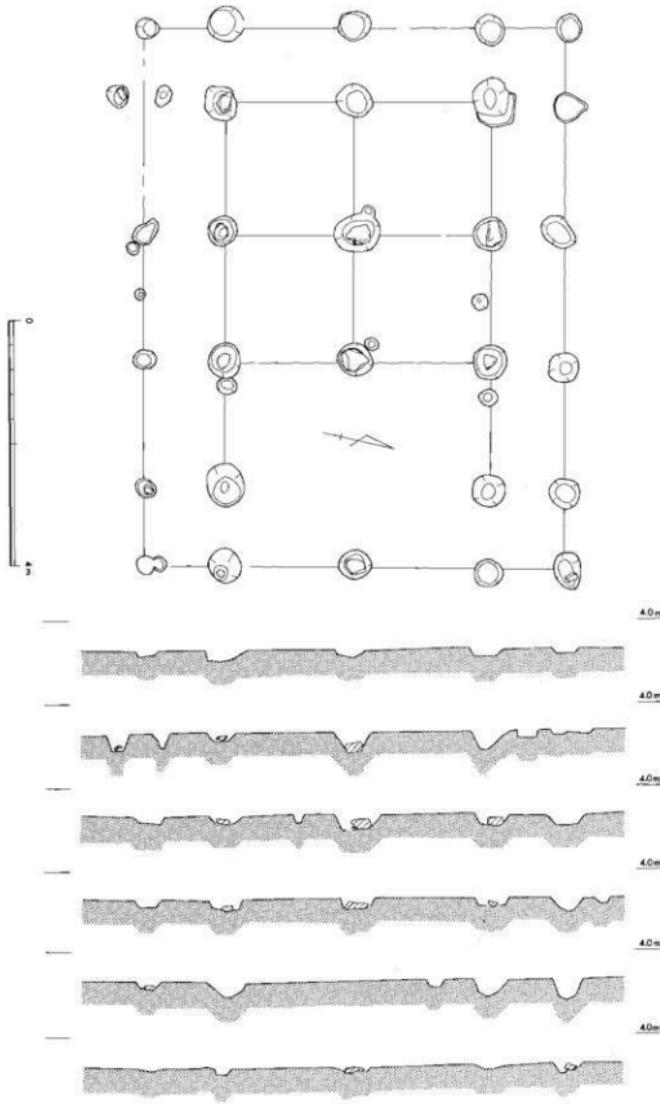


図11 渡橋沖遺跡 S-B21造構実測図 ($S = 1/80$)

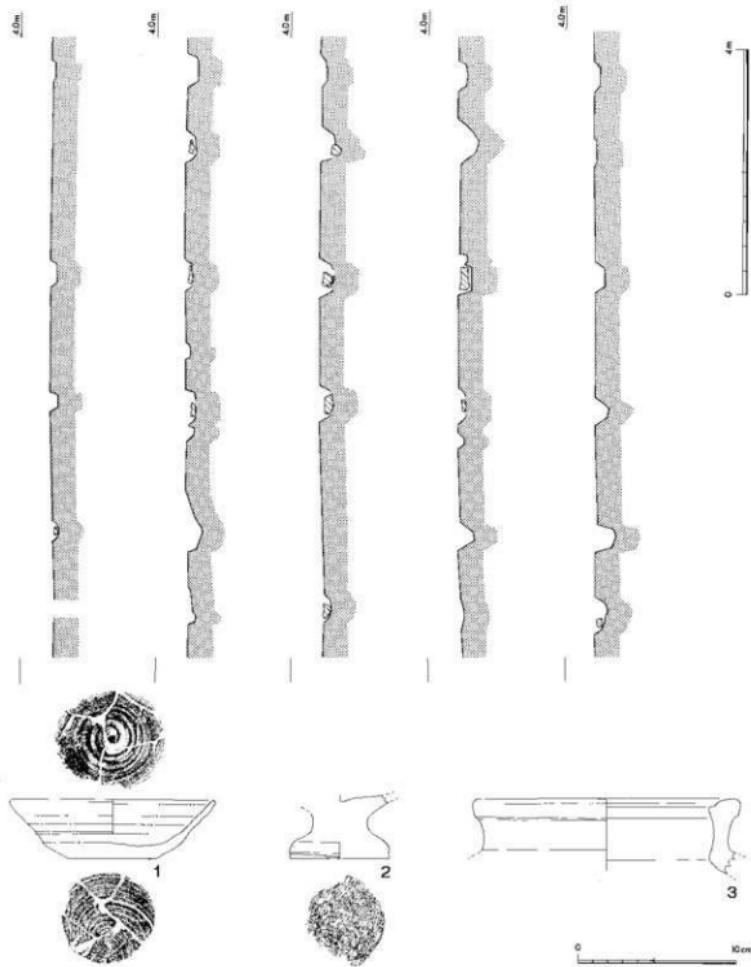


図12 渡橋沖遺跡 S B21遺構（断面）・遺物実測図
(遺構実測図 S = 1/80 遺物実測図 S = 1/3)

(13世紀)前半と思われる。

第2群の中心的な建物と見られる掘立柱建物跡がS B21(図11・12)である。規模は北6.3m、東西8.4m、建坪60m²(18坪)。その構造は本体2間×3間の総柱に四方縁が付くもので、本体柱間はすべて2.1m(1カ所無柱部分あり)、縁幅は本体柱間距離のちょうど半分となる1.25mを測り、規格的である。各々の柱穴自体も径50~70cmと大きく、削っている。また、建物を構成する柱穴30

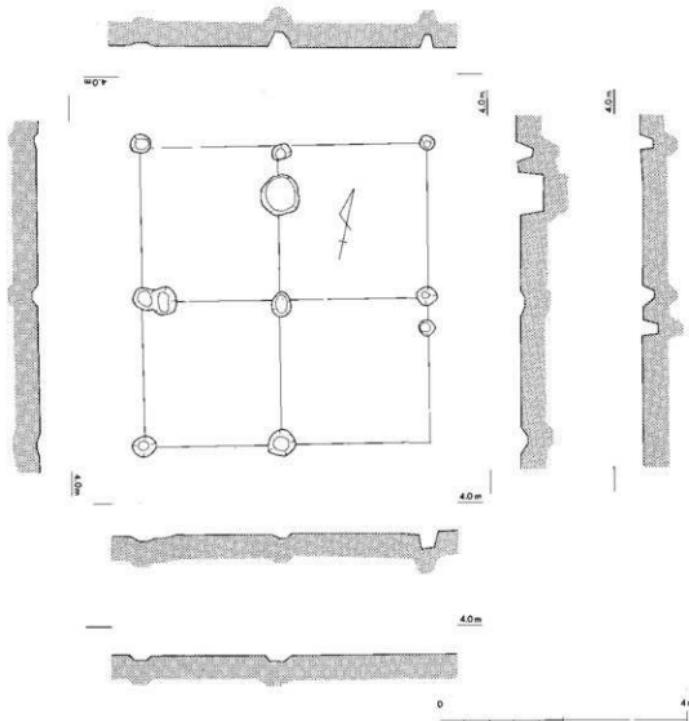


図13 渡橋沖遺跡 S B12遺構実測図 (S = 1/80)

のうち10の柱穴に根石が、図11平面図左上の柱間線から左に外れた柱穴からは板が検出された。これらはSB11の根石よりも大きく平でしっかりとしている。掘り進むとすぐに砂地に到達してしまう脆弱な地盤に建物を建てるための工法と見え、今日にいたっても原位置を保っているものが多いと見られる。このことは、SB21がSB11よりも堅牢な建物であったことを示していると考えられる。また、根拠薄弱ながら、SB11からの根石の転用の可能性も考えてみたい。ただし、SB11の柱穴のセクションからは石などを抜き出した形跡は確認していない。しかし、第1群から第2群へと建物群が移行したと考えた場合、建て替えるごとに建物の構造の質が向上したと見ることは可能だと思われる。

SB21からは図12-2に挙げた中世土師器の柱状高台皿が出上している。出土したのは図12平面図の3段目真中の柱穴埋土からである(巻末写真図版11左上)。柱部が短く底部が下に向けて踏ん張っているので13世紀中頃から後半の特徴を示すと見られる。

SB21の占める区域の中では多くのピットが検出されている。構造としては柱穴と思われるが頃

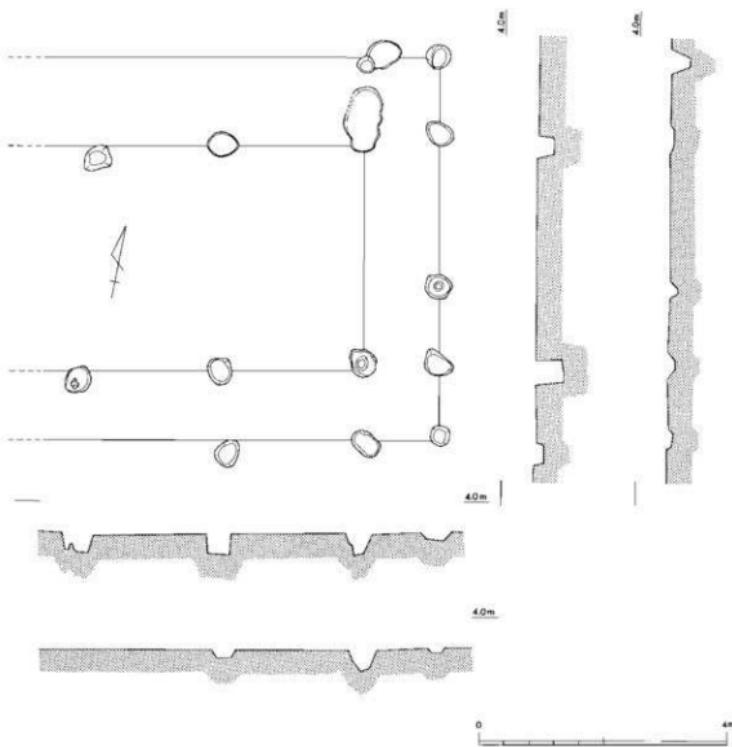


図14 渡橋沖遺跡 S-B22遺構実測図 (S = 1/80)

雜で錯綜しており、建物として組むことは困難である（図4ほか）。このようなピットの一つから図12-3に挙げた無釉焼締陶器壺の口縁が出土した。口径16.4cm測り、色調は若干茶色みを帯びた灰褐色を呈している。口縁は上から押されたようなざんぐりとした玉縁で、内側に明瞭な段が付く。この2点についてはいずれも特徴的に見える。SK06出土の図29-11やSK32出土の図43-9・10と同一個体を形成する可能性も考えられる。

同じく、第2群を構成すると考えられるSB22は、SB01と排水路に切られていて、その構造と規模は不明である。仮に図14のように組めるとすれば1間×2間以上、短辺柱間3.8m、長辺柱間2.3mの規模で1.2m幅の縁が廻ると考えられる。平面図左下の柱穴から小さな石が出土したほかは、SB21の根石のようなものはなかった。柱間距離にして約2.5mの間隔をおいて、SB21の西に長軸を揃えて並んでいる。

SB23は図15のように組むと補助線上に多くの柱穴が並ぶことになるが、向かい合うものを拾うと2間×3間（4間）の構えになる。短辺の柱間は1.8mと1.5m、長辺の柱間は西端が1.5mと中

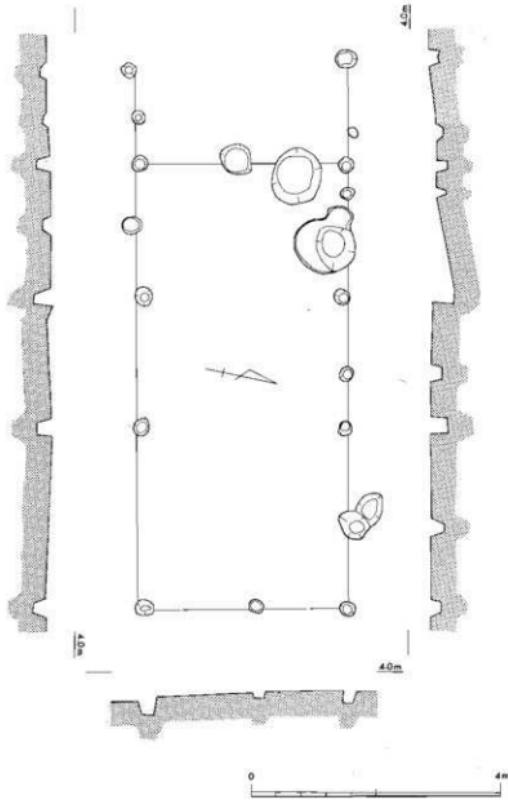


図15 渡橋沖遺跡 S B23遺構実測図 ($S = 1/80$)

中心的な位置を占める第2群として考えた4棟の掘立柱建物跡に伴う溝跡や土坑などの主要な遺構は、どのような組み合わせになるだろうか。分類した上で考えてみたい。

溝跡のグループ分けについて

まず、溝跡を遺構のみから見て可能な限りのグループ分けを試みたい。

S D04、S D11、S D05、S D13、S D23、S D24、S D25、S D21を一連の溝跡と見れば、S B21をはじめとする掘立柱建物跡の第2群と併存したと考えることは可能だろう(図4~7・21・23以下同じ)。溝跡の第2群として考えていいたい。

また、S D71、S D02(石製五輪小塔出土、巻頭カラー写真図版2、図22-13・14)、S D07、S D03を一つのグループと見ればS D04に切られているように見えるが、後述するS B01と一部軸の方向や間隔が合う部分があり、併存していた可能性を追ってみたい。S B01は4群のうち最新

2間が2m、東端が3mであった。北側に、東西方向に長軸と並行して走る柵列(図4ほか)は、S B23もしくは第2群に伴う可能性も考えられる。この遺構からは遺物は出土していない。S B24は、S B22の南に位置している。規模は1間×3間で短辺は3.4m、長辺は西端が1.8m、中間が2.2m、東端が1.5mの間隔となる。S B24は検出遺構としてはS B11ともほぼ軸が揃っているようだが、お互いを今まで見てきた図のように組んだ場合、この2棟の掘立柱建物跡どうしの間隔は60cmとあまりにも狭く、併存していた可能性はないものと考える。S B24もやはり長軸がS B21とほぼ揃っており、今まで第2群としてきた掘立柱建物跡はすべて東西方向に長軸が揃い、整然とした配置を見せていくようである。

ところで、この調査区で

段階と考えている掘立柱建物跡である。SD03と重複するSB02は第4群に含めているがSB11・12との絡みから最古段階の掘立柱建物跡である可能性がある。建物と溝との先後関係は、脆弱な砂地であることから、溝を後から掘った可能性が高いと考えられる。以上のようなことからこの溝跡の一群を第3群として考えたい。

次に、SD01を第5群として考えておきたい。SD01はSD02よりも広く深い(図21、巻末写真図版3)。SD01とSD02の先後関係は遺憾ながら土層で捉えることはできなかった。しかし、石製五輪小塔の出土状況を

見ると、火輪はSD01とSD02の交わる部分から出土しているが空風輪は完全にSD02の溝跡の中から出土している。このことは深く広いSD01よりもSD02の溝跡の方が優先することを示していると考えたい。このSD01と掘立柱建物跡との関係は、遺構のみからは追えないと思われる。

SB61と軸方向や間隔の合うSD61、SD81を第4群として考えたい。また、平成10年度調査区(E区)の北東隅で検出されたSD31、SD21、SD41、SD51を第6群として考えたい。SD31とSD21は第2群として考えたグループとのつながりが考えられるが判然としない。SD41も他の遺構との関係や機能はよくわからない。SD51は検出状況からSD23を切っている。SK25と何かを繋いでいるように見えるし、SK25に切られているように見える。SD10、SD12は第8群としておきたい。

これらの溝跡は例外なくその掘り込みの最底部は砂質土部分に到達している。

土坑のグループ分けについて

SB12との間隔からSK04を第1群として考えたい。また、SB11との間隔から、SK08もこの第1群として考えておきたい。ただし、SK08は後述する第2群として考えられる可能性もある。

掘立柱建物跡の第2群と溝跡の第2群との関係から、土坑の第2群としてSK06、SK07、SK08、SK09、SK02、SK21、SK22、SK32、SK37、SK12を考えておきたい。また、この第

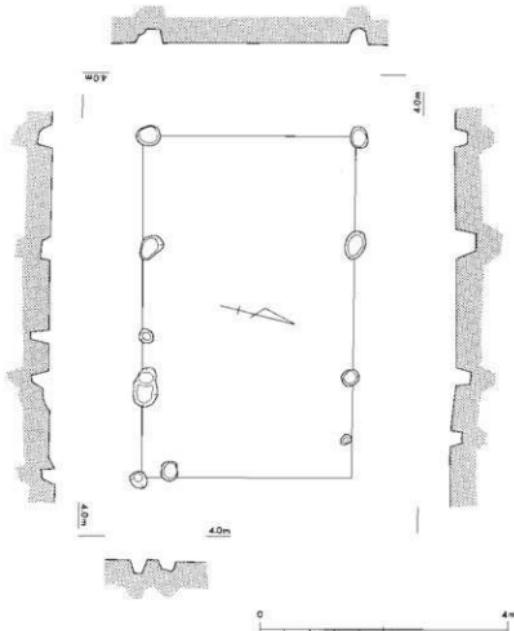


図16 渡橋沖遺跡SB24遺構実測図(S=1/80)

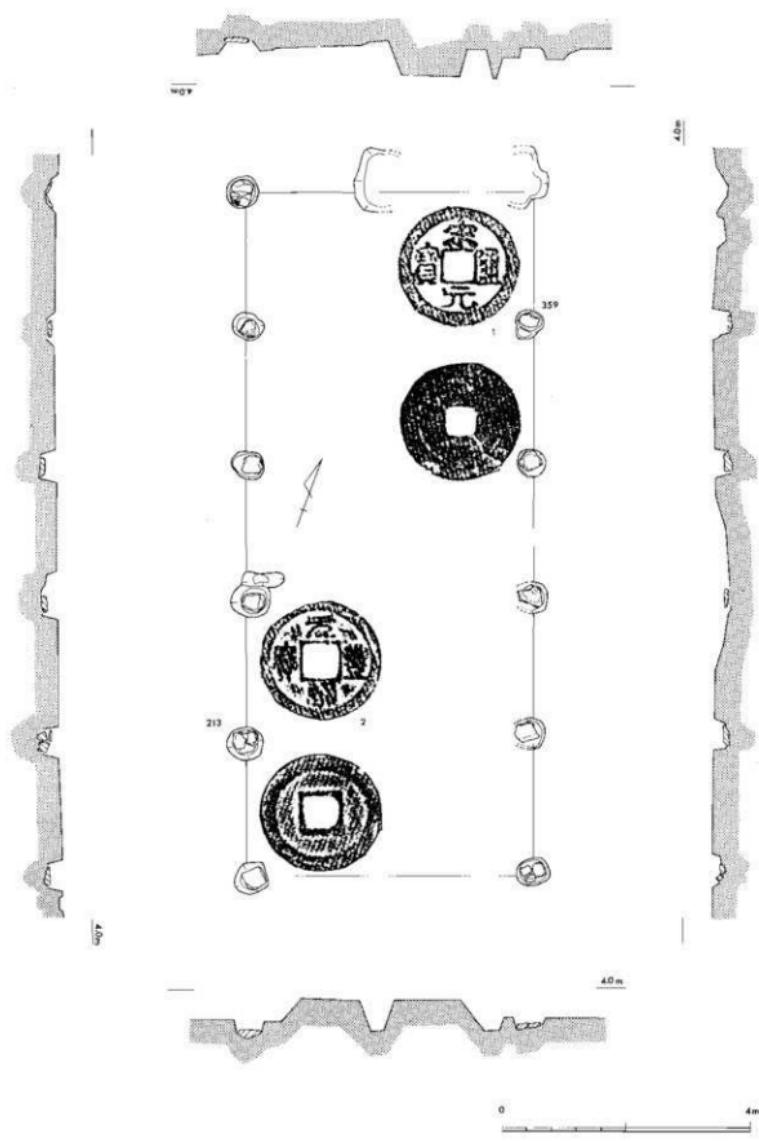


図17 渡橋沖遺跡 S-B01遺構実測図 (S=1/80)・出土錢貨拓影 (实物大)

2群については、位置や規模、形状などからさらに4つのグループに細分したい。第2群の掘立柱建物跡と溝跡に囲まれていて比較的規模が大きく、形状も若干特異に見えるSK06を2-aとしたい。掘立柱建物跡第2群に対して対称的な位置にあるSK07とSK08を2-bとしたい。ただし、先述したように、SK08は第1群に数えなければならないかも知れない。また、第2群の掘立柱建物跡と溝跡の外に並ぶSK09、SK02、SK21、SK22、SK32、SK37を2-cとしたい。さらに、SD11との位置関係からSK12を2-dとしておきたい。

SD03、SB01との位置関係からSK10を第3群として考えたい。SK10は平面図が図23ほかのようになっているが、どちらも形を崩し合っていないのでSD03との併存は可能だと考えている。

SD51との位置関係からSK25、SK26、SK27を第6群としたい。

掘立柱建物跡第2群の区域内に掘り込まれたSKと土坑第2群のSK21を切っているSK24を第7群として考えたい。

その他の土坑SK03、SK05、SK11、SK13、SK14、SK23、SK28、SK29、SK30、SK33、SK34、SK35などを第8群とする。

再び掘立柱建物跡について

図17は掘立柱建物跡第3群として分類したSB01である。造構としては第1群や第2群の掘立柱建物跡を切っているがSB01自身は排水溝に切られていた。南北の断面図に見える掘り込みのレベルが高く深いコップ形が排水溝の断面である。SB01の検出面はすでに砂地に到達している部分があった。建物の規模は1間(2間)×5間。短辺4.6m、長辺11.5m。長辺の中間は2.3m、短辺の

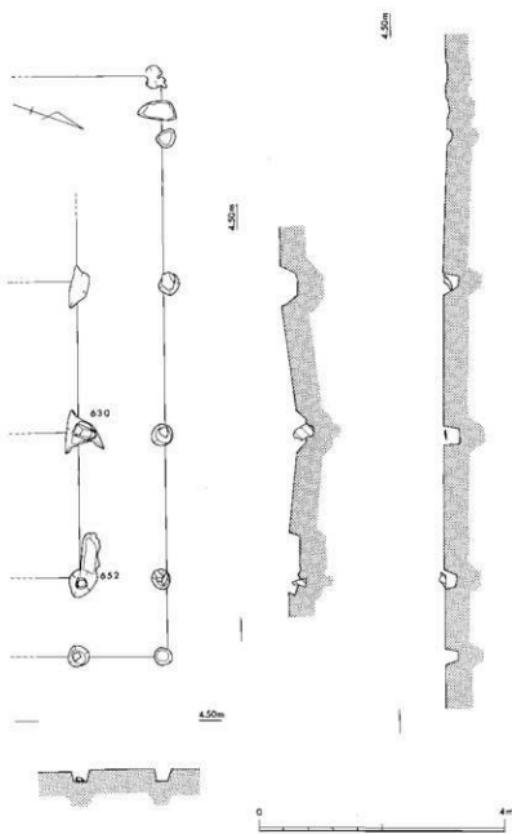


図18 渡橋沖遺跡SB61遺構実測図(S=1/80)

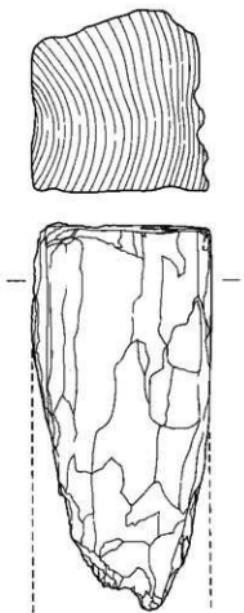


図19 渡横沖遺跡SB61出土柱根実測図
(S = 1/4)

産地、この場所に運ばれてきた経路などは不明である。

S B01では359、213の二つの柱穴から中国の宋王朝時代（西暦-以下同じ-960年～1279年）の現在の河南省開封に都をおいた北宋時代（960年～1127年）の銭貨である北宋銭が出土している。

図17、359の柱穴から山上した銭貨は「宋通元寶」で、穴底の根石に到達するまでに一手に余るほどの中世土師器碗皿類の欠片や炭の欠片とともに採集された（巻末写真図版9右上）。土器の欠片よりも出土位置が低かった。213の柱穴からは「元豊通寶」が山上した。これは、5個以上の平らな面を上にして組まれた石の間から出土したもので、この北宋銭以外には中世土師器碗皿類の破片が出土している。

「宋通元寶」は、北宋（太祖）960年（建隆元年）初鑄^③、刻字体は行書。ほとんど欠損がない。直徑2.5cmたらず、重さ2.55g裏が偏平であることから模鋳銭の可能性も考えられる。

「元豊通寶」は、北宋（神宗）1078年（元豐元年）初鑄、刻字体は篆書。これもほとんど欠損がない。直徑2.5cmたらず、重さ3.30g。山上時一部には「黄金」色が保たれていた。本銭の可能性が高いと思われる。

ところで、この2枚が出土した柱穴は、359がS B01の建物の「鬼門」に、213が「裏鬼門」にそれぞれ当たる。このように中世土師器の細片を伴っていたということは、S B01の建物を建てる前、

中间に柱穴があったかどうかは、排水溝に切られていって不明と言わざるを得ないが、仮に柱穴があるとすれば1つで、その柱間は2.3m程度。長辺と同じ柱間距離をとることとなり、すべての柱間が同間隔ということになりそうだ。構造は違うが、S B21と同様に非常に規格的な配置になっている。

図17、S B01平面図右上隅の柱穴は検出し切れなかつたが、その他の柱穴には例外なく根石が入っており、ほかの掘立柱建物跡と際立った違いを見せている。例えばS B21と比較しても、大きく平らな石が柱穴一杯に底深く埋め込まれているようす（ほとんどの石の最上面が標高3.4m以下）がわかる。この深く埋め込まれたことが、後世の石の掘り起しを免れた要因の一つと考えられる。このことは、また、この区域の根石を用いた建築方法の発達していった過程か、あるいは、転用した可能性を示しているものと考えられ、いずれの場合も第1群→第2群→第3群という掘立柱建物跡の変遷を裏づけるものとみた。ちなみに、根石の据え方については、213の柱穴には5個以上の大小の石を組み合わせて、平面図左上の柱穴には3枚の平らな石を組み合わせて据えられているが、その他の柱穴には、それぞれの柱穴の径の大きさに見合った1枚の平らな石が据えられていた。これら根石の岩石種類と生

この建物を建てるに当たり、錢貨そのものがもたらす（發揮する）効果を期待して、いわゆる「地鎮め」²³を行なった跡と考えたい。

掘立柱建物跡第4群としたSB61(図18)は、その建物構造の北端(縁と思われる)が、わずかに、平成10年度調査区(E区)にかかった状態で検出された。検出面は黄色を呈して、乾くと非常に固くなる粘土であるが柱穴の覆土を掘り込んでいくとやはり砂地に到達する。建物跡全体の構造については把握し切れなかったが、SB21と同様の構造が予想される。おそらく、確実に押さえられると思われる廻り縁の幅が1.3m、本体の柱

間が2.3m程度と、SB21よりも若干大きい規模が想定できるとみられる。寸法取りについてはSB01と共に通しており、長軸についてもおそらく軌を一にしているものと思われる。双方を隔てる距離は27mときたるものではないが、「第1節 発掘調査の経過と概要」のところで述べたように、SB01とSB61の間に横たわる一帯が発掘調査できなかったため、寸法取りと、長軸方向の共通性以外にこの2棟の掘立柱建物跡を結びつける材料は得られなかった。

SB61の本体北端の二つの柱穴(630、652)からは柱根が出土した。図19(巻末写真図版22 図19)は630から出土したものである。残存長41.9cm、幅18.6cm、厚さ16.1cmを測る太い角柱であった。652から出土したもの(巻末写真図版22 18-652)も角柱で、図19に挙げたものよりも一回り小さなものであった。どちらも材質は針葉樹と見られる。

このSB61が検出されたことによって、渡橋沖遺跡の遺構群、それも、かなり重要な部分が調査区を超えて、南に広がっていることが明らかになったと言える。

SB71は検出された渡橋沖遺跡の建物跡の中で最も東において検出されたものである。この掘立柱建物跡の検出面もほとんど砂地であった。構造は1間×2間、短辺3m、長辺5m、長辺柱間距離は2.4~2.5mを測る。この遺構に伴う遺物はなかった。

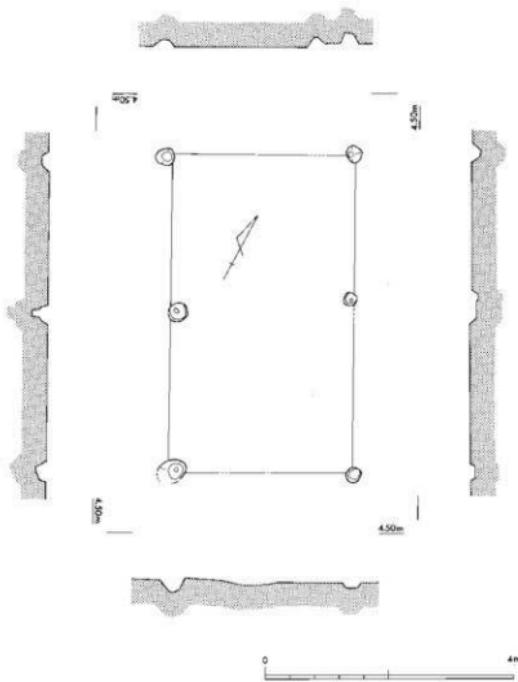


図20 渡橋沖遺跡SB71遺構実測図(S=1/80)

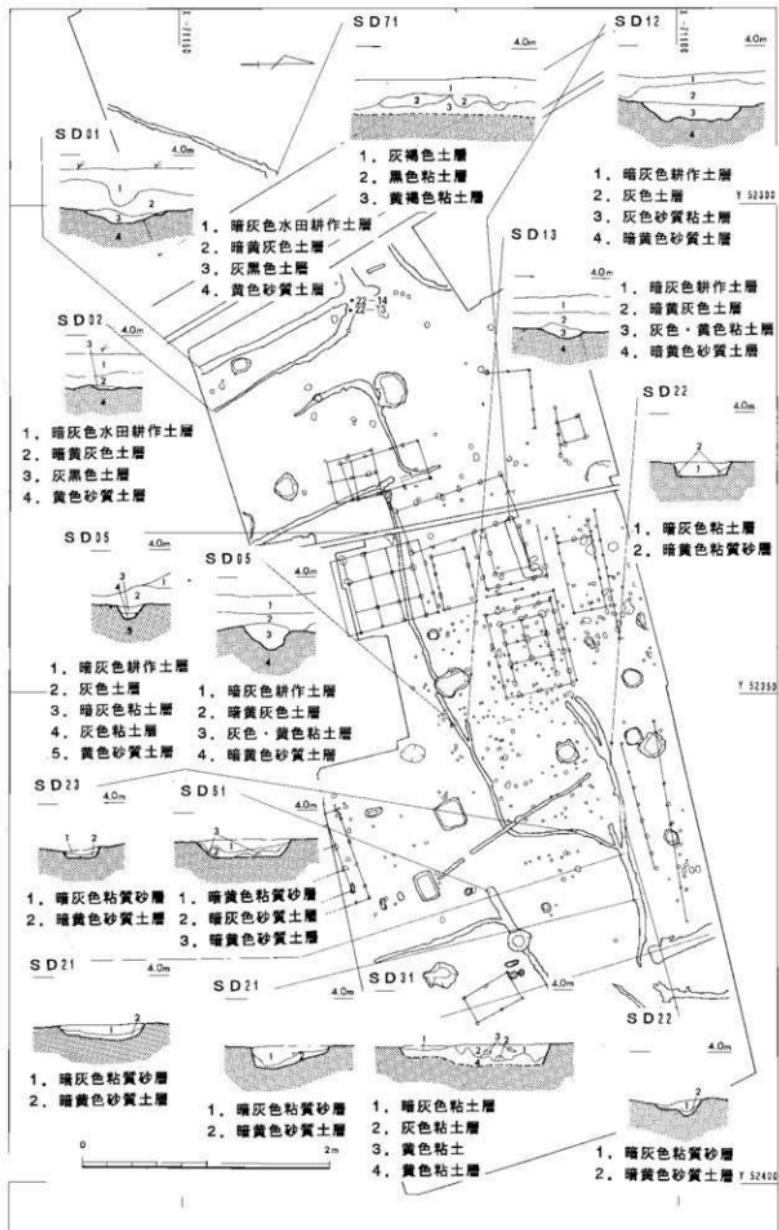


図21 渡橋沖遺跡溝跡土層断面図（全体図 S = 1/500 断面図 S = 1/40）

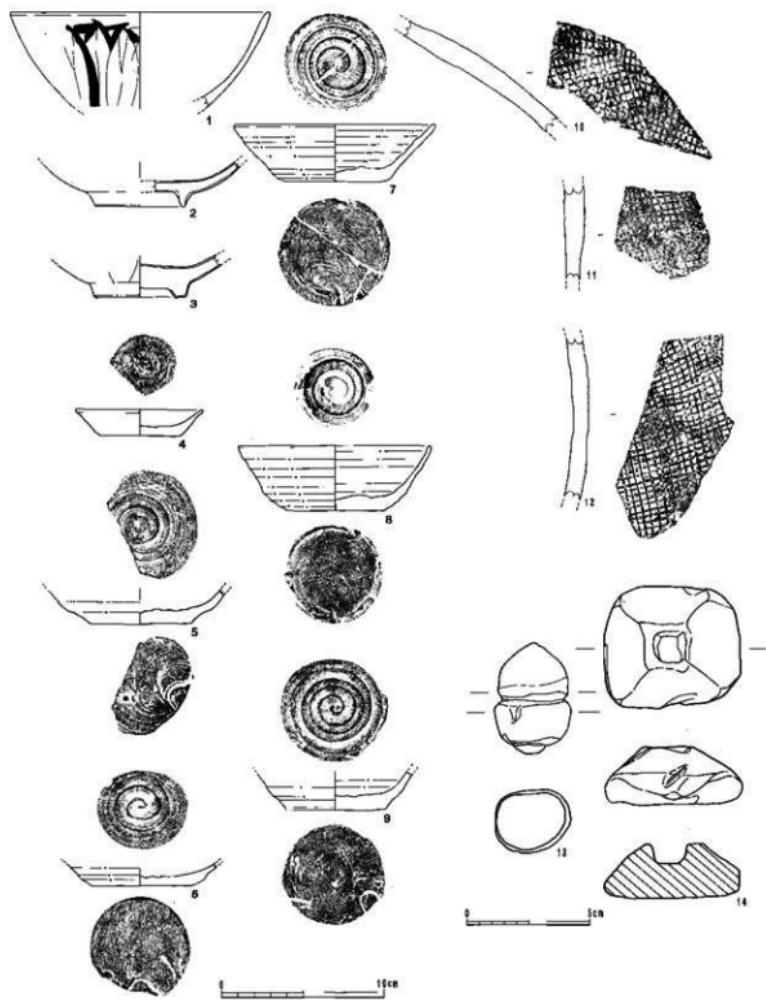


図22 渡橋沖遺跡溝跡出土遺物実測図
(石製五輪小塔S = 1/2 中世土師器・青磁S = 1/3)

溝跡出土遺物について

溝跡のグループ分けについて(21~22ページ)で述べたように、主な掘立柱建物跡と土坑との位置関係から、溝跡を次のようにグループ分けした。なお、第1群と第7群は欠番とした。(図23)
第2群: SD04 SD11 SD05 SD13 SD23 SD24 SD25 SD21 SD22



図23 渡橋沖遺跡検出土坑位置図 (S = 1 /500)

第3群：SD02 SD03

SD07 SD71

第4群：SD61 SD81

第5群：SD01

第6群：SD31 SD21

SD41 SD51

第8群：SD10 SD12

溝跡から出土した遺物の中
で図化できたものは、図22に
挙げた14点であった。

結果、図22の1～5、10～
12までが第2群（SD25、S
D05、SD21、SD04）、6
と13～14が第3群（SD03、
SD02）、7～9が第6群
（SD31）の各遺物を取り上
げることになった。

溝跡第2群から出土した青磁

について

図22-1～3は中国陶磁器
竜泉窯系青磁で、1は体部外
面に錦運弁文を施した碗I—

5 b類^④の体部から口縁にかけての部分で、内外ともオリーブ色に発色している。SD25の覆上
の暗灰色上層中から出土した。2は竜泉窯系青磁環III類の底部から腰部とみられ、暗い青緑色を呈
している。高台は断面三角形で、高台内も体部と同様に釉薬がかけられ、同様に発色している。脛
付は尖って内外とも釉薬が搔き落とされ境目が茶色く焼け付いていた。SD23の屈曲部から少し西
に行ったところで暗灰色粘質砂層から出土した。3は、これもやはり竜泉窯系青磁碗I～5 b類の
底部から高台脇にかけての部分で、おそらく体部外側に錦運弁文を施しているものとみられる。淡
い青緑色を呈する。高台は切り高台で、外側に数カ所釉薬を彈いて茶色に焼け付いた部分がある。
高台内は若干切り込み部分から釉薬が流入しているが、灰色の地肌が露胎している。重ね焼きした
ときの筒状の窯道具の上端が扇形に容着している。

溝跡第2群から出土した中世土器について

図22-4は中世土器の盤である。復元口径9.8cm、復元底径5cm、器高2.6cmを測る。内面底部
にはロクロ成形の痕跡と思われる指ナデによる渦巻き痕が見える。底部は回転糸切り痕がわずかに
残る。体部は斜め上方にまっすぐ伸びて丸く納めている。明るいベージュ色で、所々に濃い赤みが
かったベージュ色の部分がある。島根中世Ⅲ期後半の特徴を示す。図22-1と同様SD25の覆上暗
灰色上層中から出土している。図22-5は中世土器の椀か壺と思われる。色調は白身がかったベー
ジュで、一部赤みがかったベージュに発色している。復元底径6cmあまり、底部外側には糸切りの

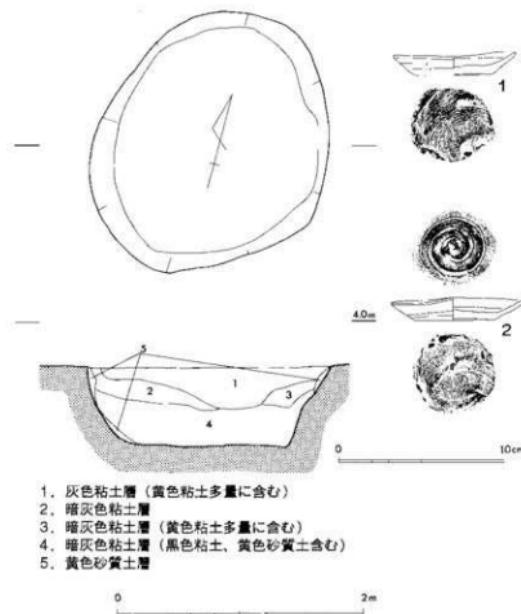


図24 渡橋沖遺跡SK02遺構・出土土器実測図
(遺構S=1/40、中世土器皿はS=1/3)

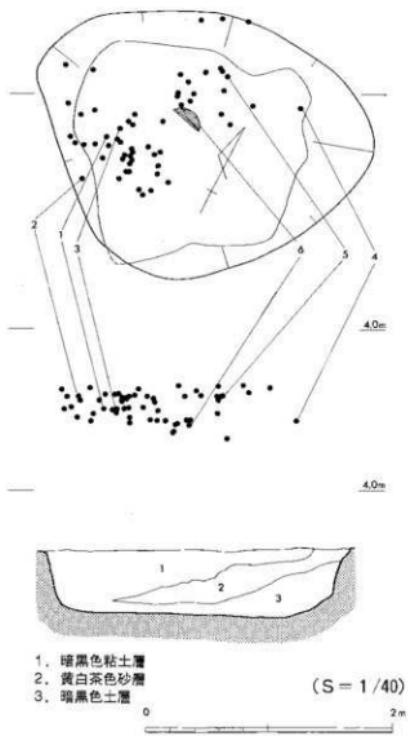


図25 渡橋沖遺跡 S K04遺構・遺物出土状況実測図

と見られ、第2群の掘立柱建物跡と、第2群の溝跡の実年代をある程度反映しているものとみたい。溝跡第3群から出土した中世土師器について

第3群に分類して考えたSD03から出土した中世土師器の破片の中で、かろうじて図化されたのが、図22-6の中世土師器碗の底部片であった。底部外間に回転糸切り痕と、内面に指ナデによる渦巻き痕が付く。色調は薄いベージュで、破片断面は赤みがかったベージュ。底径は6cmで、この寸法は、図22の中世土師器碗で一致している。6の体部はかなり開いて立ち上がるようにも見える。図22-5ほどではないにしても、若干腰部にアクセントがある。SD03のSK10よりも東側、北に向けて屈曲した部分で覆土（暗灰色土層）中から出土した。

溝跡第3群から出土した石製五輪小塔について

第3群に分類したSD02からは、SD01の合流付近の暗灰色の覆土中から石製五輪小塔の空風輪と火輪が別々に出土した（図22-13・14、巻頭カラー写真図版2上、巻末写真図版3下）。大きさの釣り合いも取れており、隣も概ね合っているので一体のものと思われる。

空風輪は一体成形で、晴も含めて高さ4.52cm、重さ26.93g。火輪は高さ2.25cm、長幅5.48cm×短

痕跡があり、底部内面にはロクロ成形の指ナデによる渦巻き痕跡がある。口縁は欠いているが、底径の割合が大きく見える。腰部への立ち上がりに凹部があり、アクセントとなっている。島根中世III期後半の特徴を示すものと思われる。²⁵

溝跡第2群から出土した中世須恵器壺について

図22-10～12は中世須恵器壺の肩部から胴部にかけての破片で、外面には格子状のタタキ目が付いている。これらの破片はSD04の調査区壁に近い地点の溝跡の覆土（暗灰色土層中から一括して出土したものである。検出時はすでに壺の形をなしていないかった。

第2群の溝跡から出土したものの中で図化できたのは以上の8点であった。この他にも中世土師器の破片が多く出土している。非常に少ない量ながら、竜泉窯系青磁I-5a類とIII類とみられる青磁（図22-1～3）が出土していることから、溝跡第2群の組み合わせが成立するならば、13世紀後半の年代、が与えられるものと考えられる。このことは第2群の溝跡から出土した中世土師器の椀皿類や、掘立柱建物跡第2群のSB21柱穴内から出土した柱状高台皿の時期とも符合するもの

幅4.94cm、重さ54.08g。組み合せた残存高は6.39cmとなる。材質は空風輪も火輪も同一で、中粒酸性凝灰岩であり、この地域で比較的容易に手に入る物である。

形態的特徴について：梵字の刻字が見えない（あるいは最初から彫っていなかったかも知れない）ので表裏の向きを判別するのがほとんど不可能であった。空風輪については、宝珠先端の突起が原初（12世紀後半）^{※1}的形態のものと比較して、やや顕著になってきていること、請花との接合部の割り込みが単調で、「 \angle 」形であること、請花の下への曲線が若干緩いことなど、いずれも、時期的には13世紀後半から14世紀代の様相を呈していると見られる。

火輪については、笠石が低く偏平なのは、導入時期の原初的特徴を残す地方的特色が現れていると見られる。また、四隅の反りが強調されるのは、中国地方、九州地方の地域的特色を示していると考えられる。

この図22-13・14のように空風輪と火輪の接合部に四角い勝を切っている例は少ないようである。

五輪小塔の材質について：この石製五輪小塔の注目すべき点は材質で、このような小塔を石を用いて造るのはあまり例がないということである。このような石製五輪小塔の材質については土製の「泥塔」と呼ばれるもの、陶製のもの、水晶製のもの、金銅製のものなどがある。

五輪小塔の用途・性格について：五輪塔は仏教の五輪思想を形にして塔にしたものだが、仏舎利容器でもあり、信仰対象でもある。土製、陶製のものは、おもに、仏陀と一緒に成仏することを願う人々によって、死者とともに埋葬される例が多いようである。また、水晶製、金銅製のものは信仰対象として人々の鑑賞に耐えうる高度な工芸美術品的なものが多いようである。

前段の材質のことと考え合わせると、渡橋沖遺跡のこの小塔は凝灰岩製で、細工が施しやすく、丁寧な造りであり、作者の真摯な姿勢が伝わってくるようではあるが、美術工芸品の価値観から見れば、水晶製、金銅製のものに比べべくもない。出土状況からはにわかに導き出せないが、死者とともに一旦埋葬された可能性も考えられる。

なお、島根県内の小塔の出土例としては、大田市の南八幡宮境内から、泥塔が1基出土している。

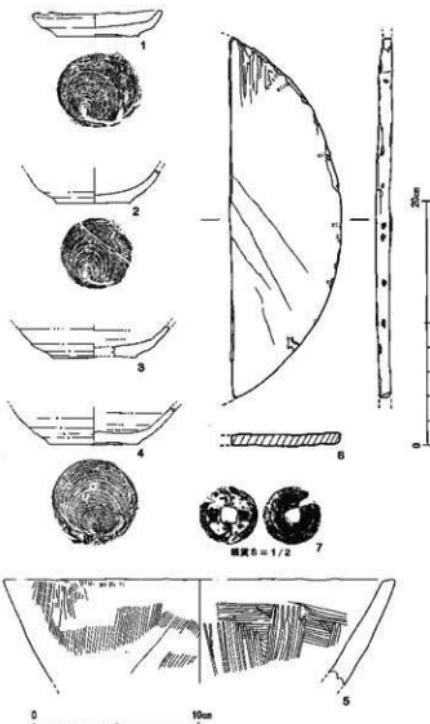


図26 渡橋沖遺跡SK04出土遺物実測図
(中世土器S=1/3 木製品S=1/4)

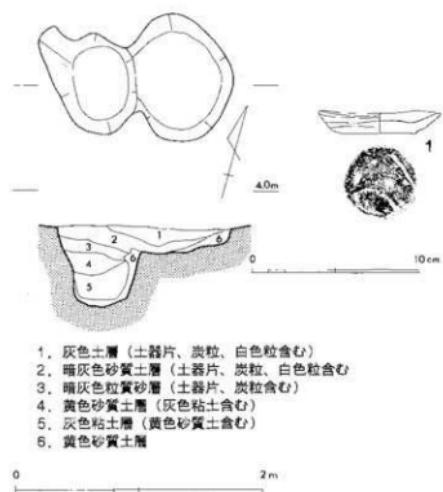


図27 渡橋沖遺跡 S-K07遺構・出土土器実測図
(遺構 S = 1/40 中世土師器皿は S = 1/3)

残している。後述する図22-8もそうだが、この底部内面の指ナデによる渦巻き痕が今まで見てきた指の腹を直接使ったような痕ではなく、鋭く細い沈線が走っており、技法は同じでありながら、使用具の違いが見られる。底部外面と体部の立ち上がりとの境界がシャープさを欠き、丸く納めて立ち上がらせ、斜め上方にまっすぐ伸ばして何のアクセントもなく、口縁端も丸く納めている。法量以上に開いて浅い感じがする。島根中世IV期の特徴を示す。8は復元口径12cm程度、底径6cm、器高4cmを測る。色調は赤みがかったベージュから淡いベージュ。底部外面に回転糸切り痕、内面に指ナデによる渦巻き痕がある。内面は7と同じ様相である。胎土は7に比較すると精良といえる。底部外面から体部への立ち上がりも7と同じ様相だが、立ち上がってからは丸みを帯びる。断面は若干違和感があるが、外形は7とさほどの違いはない。図22-9は底部から体部にかけての破片で、底径6cm、赤みがかったベージュから灰色をしており、胎土に若干砂粒を含む。底部外面に回転糸切り痕、内面に指の腹によるナデ痕がある。底部外面からシャープに折れて立ち上がり、腰部が凹んでアクセントになっている。島根中世III期後半の特徴を示す。

溝跡出土遺物までのまとめ

溝跡第2群からは中国青磁の竜泉窯系青磁I-5a類の碗とIII類の环、中世土師器の碗皿類、中世須恵器甕壺類が出土した。13世紀後半の年代観が与えられると考えたい。

溝跡第3群に分類したS-D03の中世土師器の欠片からはなんとも言い難いが、SD02から出土した石製五輪小塔の姿は鎌倉時代から南北朝期の形式をとどめているようだ。

溝跡第6群として分類したSD31から出土した中世土師器は、島根中世III期後半からIV期と時期幅を持っているようだ。藏小路西遺跡⁴⁸の発掘調査成果によれば、13世紀後半から14世紀にかけてということで鎌倉時代から南北朝期を考えたい。

この泥塔は鉄塔や経筒を囲う六角堂の修理の際に採取されたもので「五輪塔形の両面に梵字を刻んだもので、現在風輪と空輪が欠けている。高さ6.3センチ、地輪の幅3.9センチ、厚さ1.9~1.7センチをはかる。灰白色を呈し、胎上こまかく焼成率⁴⁹である。」とされ15世紀末を過るものではないようだ。⁴⁷

溝跡第6群から出土した中世土師器について

図22-7~9は中世土師器碗で、いずれも、溝跡の第6群として分類したSD31から出土したものである。口径は12.4cm、底径は6cm、器高は3.5cmを測る。色調はアイボリーで断面は赤みがかったベージュをしている。胎土は非常に多くの砂粒を含んでいる。底部外面に回転糸切り痕、内面に指ナデによる渦巻き痕を

ここまでこのところで掘立柱建物跡と溝跡を照合してみると、以下のように考えられるのではないかだろうか。

掘立柱建物跡群

第1群：SB11 SB12

第2群：SB21 SB22 SB23 SB24

第3群：SB01 (SB61)

第4群：SB02 SB03 SB61 SB71

建物跡としては、SB02が最古である可能性と、SB61が第3群に入る可能性 (SB61とSB01の長辺がほぼ同軸) を留保しつつも、遺構そのものの相互関係を中心に第1群→第2群→第3群という変遷を想定した。

ほんのわずかの出土遺物からもこの変遷が垣間見える。すなわち、SB12から出土した中世土器碗 (図12-1) と、SB21から出土した柱状高台皿 (図12-2) である。図12-1の中世土器碗は、口径に比べて底径が小さく、形式も13世紀前半の特徴を示していた。一方図12-2の柱状高台皿は、高台の底部断面が「ハ」の字状に広がっており、13世紀中頃から後半の特徴を示している。

また、多少かけ離れてはいるが、それでも、第3群に分類したSB01の「元豊通貢」は、この造構の遡る上限を11世紀後半でのところで塞き止めてくれている。

したがって、掘立柱建物跡第1群には13世紀前半、第2群には13世紀中頃から後半の年代を仮に与えておきたい。

溝跡群

第2群：SD04 SD11 SD05 SD13

SD23 SD24 SD25 SD21

SD22

第3群：SD02 SD03 SD07 SD71

第4群：SD61 SD81

第5群：SD01

第6群：SD31 SD21 SD41 SD51

第8群：SD10 SD12

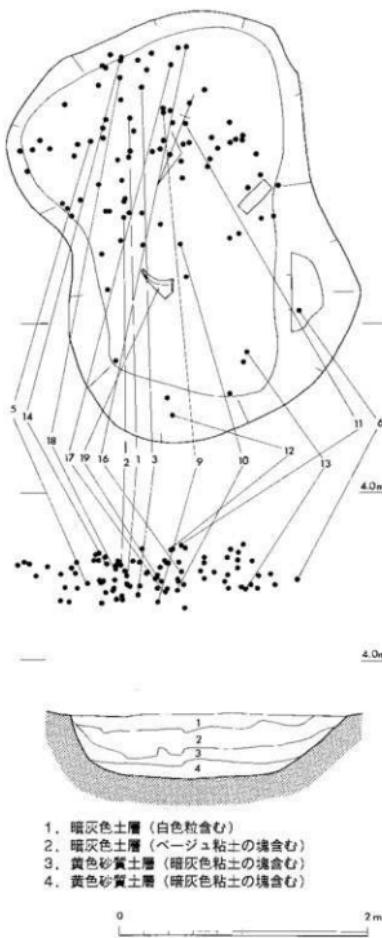


図28 渡橋沖遺跡SK06遺構・遺物出土状況実測図
(S = 1/40)

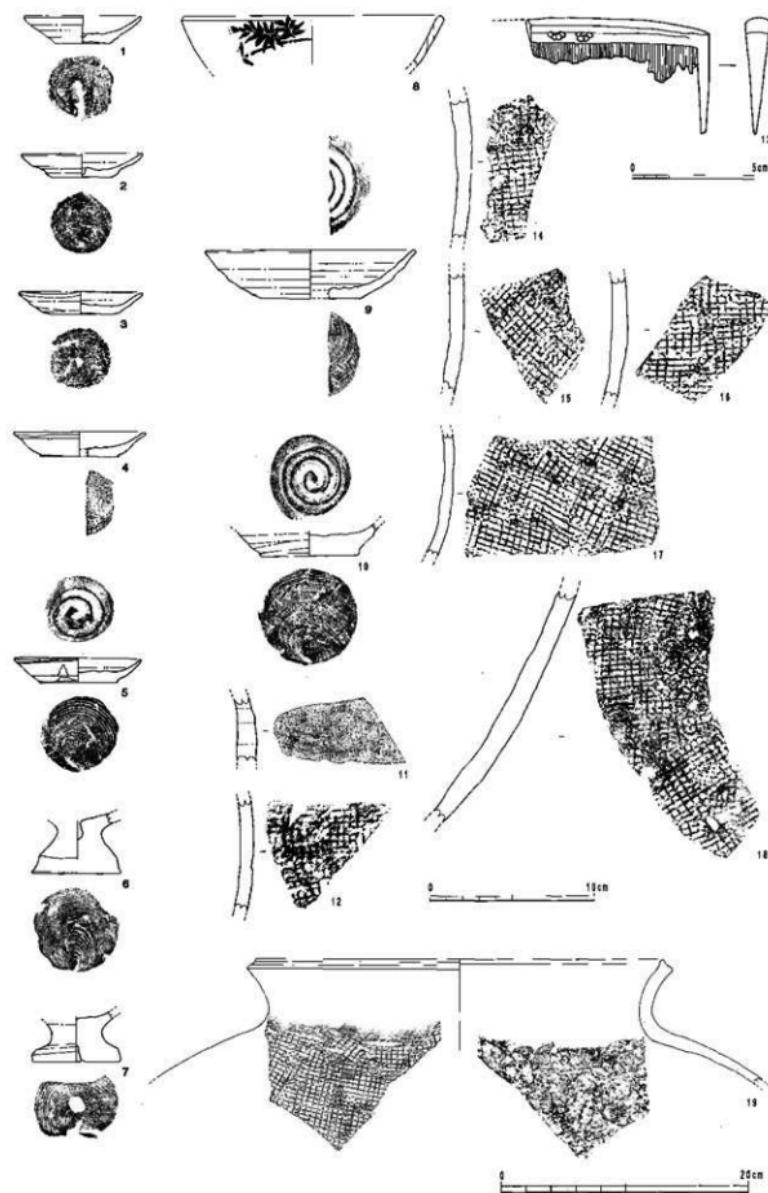


図29 渡横沖遺跡SK06出土遺物実測図
(機S=1/2 陶器壺口縁S=1/4 その他S=1/3)

溝跡では、遺構相互の関係もさることながら、掘立柱建物跡群と土坑群との関係もその要素に含めて分類、グループ分け、ナンバリングを行なった。その結果、第1群と第7群がカップリングできずに欠番となってしまった。遺物も、図化できたものはわずかであり、第2群、第3群、第6群とかたよってしまった。しかし、掘立柱建物跡とカップリングした第2群と、第3群から年代を類推するにあたって、貴重な材料を得ることができた。すなわち、溝跡第2群の中国竈泉窯系青磁（図22-1～3）と中世土師器（図22-4～5）であり、溝跡第3群の石製五輪小塔（図22-13～14）である。

図22-1の竈泉窯系青磁碗I-5b類は13世紀前半から盛行するという。図22-2の竈泉窯系青磁碗III類は13世紀後半に盛行するという。図22-5の中世土師器は13世紀後半の特徴を示していた。また、図22-13～14の石製五輪小塔は鎌倉時代から南北朝期の特徴を備えているようだ。これらのことから、溝跡第2群には13世紀後半までの年代観があてはまる。そうだ、溝跡第3群には13世紀から14世紀という非常に広い年代観が与えられる。

ここで、掘立柱建物跡と溝跡のそれぞれのグループを組み合わせて整理してみると次のようになると思われる。

◎掘立柱建物跡第1群の年代が13世紀前半

◎掘立柱建物跡第2群と溝跡第2群が組み合わさって13世紀後半

◎掘立柱建物跡第3群と溝跡第3群が組み合わさって13世紀後半から14世紀に至る。

この第3群の組み合せが成立するとすれば、S B22とS B01の先後関係からこのグループが第2群よりも優先しており、時期的に最も新しい組み合せであると言える。

◎掘立柱建物跡群と溝跡群の遺構を同番どうし組み合せた上での遺構群の変遷は次のようになる。

第1群 ⇒ 第2群 ⇒ 第3群

（13世紀前半代）（13世紀中頃～13世紀後半代）（13世紀後半～14世紀代）

ここまでとところで、宗教的な様相と民間信仰的な様相の一端を垣間見ることができた。溝跡SD02から出土した石製五輪小塔と、掘立柱建物跡SB01の柱穴から出土した北宋銭である。

石製五輪小塔は、それをして工人に作らしめる宗教思想的背景はもとより、当時の政治、経済、社会、あらゆる様相を知る重要な手がかりと思われる。また、SB01の「鬼門」と「裏鬼門」にあたる柱穴から「宋通元寶」と「元豐通寶」の北宋銭を用いた「地鎮め」の跡を検出したことによって、建築に対する、あるいは土地に対する人々の民間信仰的な一面を見ることができると思われる。ことによると、この祭祀のようすから、SB01の性格が割り出せる可能性も考えられる。

さらに、この2件が、いずれも、第3群に分類、グループ分けした遺構からの出土であったことは興味を引いて止まない。このような宗教的、民間信仰的祭祀、儀礼のこの地における萌芽、あるいは移入を、第3群の時期と連動させて考えたくなる。

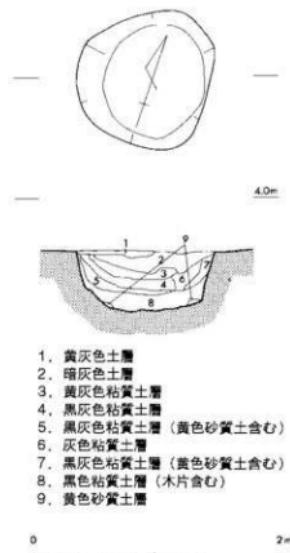


図30 渡橋沖遺跡 S K08遺構実測図
(S = 1/40)

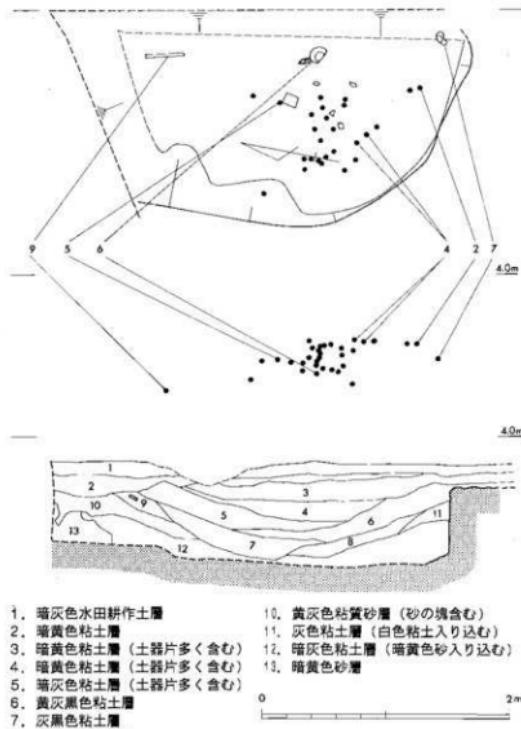


図31 渡橋沖遺跡 S K09遺構・遺物出土状況実測図 (S = 1/40)

土坑について

土坑群については22ページから24ページにかけて検討したように、掘立柱建物跡の遺構群と溝跡の遺構群との相互関係から以下のように分類、グループ分け、ナンバリングをした。

- 第1群 : SK04 SK08
- 第2群 a : SK06
- 第2群 b : SK07 (SK08)
- 第2群 c : SK09 SK02
SK21 SK22
SK32 SK37
- 第2群 d : SK12
- 第3群 : SK10
- 第6群 : SK25 SK26
SK27
- 第7群 : SK24 SK31
- 第8群 : SK05 SK11
SK13 SK14
SK23 SK28
SK29 SK30
SK33 SK34
SK35

土坑第1群の分類にあたっては、掘立柱建物跡第1群 (SB11とSB12) との位置関係に着目した。

土坑第2群の分類にあたっては、掘立柱建物跡群、溝跡群双方の第2群との位置関係に着目した後、さらに、それぞれの位置関係に着目して四つの小グループに細分した。2-aとしたSK06は位置と形と規模に、2-bとしたSK07とSK08は掘立柱建物跡第2群との位置関係に、2-cとしたSK09以下5基の土坑は掘立柱建物跡第2群と溝跡第2群が開む区域との位置関係に、2-dとしたSK12はSD11との位置関係にそれぞれ着目した。

SK10を第3群として分類するにあたっては、溝跡第3群のSD03との位置関係に着目した。

土坑第6群の分類にあたっては、溝跡第6群のSD51と群中の各土坑の位置関係に着目した。

土坑第7群の分類にあたっては、SK24は土坑第2群のSK21との切り合い関係に着目した。SK31については掘立柱建物跡第2群と溝跡第2群の開む区域との位置関係に着目した。

第8群は、上記7群の分類から漏れたものを一括して分類した。

土坑群の第4群と第5群は掘立柱建物跡や溝跡とのカップリングができず欠番となった。

土坑第1群について

て

第1群として分類したSK04(図25)は、掘立柱建物跡第1群に分類したSB12の南側にある(図23)。

平面形は隅丸三角形、短径2.2m、長径2.6m、深さは50cmを測る。この土坑は、ほぼ砂質土の中に掘り込まれており、底は地下水、伏流水が滲出した。

遺物としては、陶器調理具、中世上師器碗皿類、薄板、曲げ物底、北宋錢などが出土している。このうち、

図化できたものは、図26に挙げた7点であった。

図26-1は中世上師器皿である。口径7.5cm、底径5cm、器高1.7cm。色調は黄褐色を呈し、胎土に多くの砂粒を含む。底部も体部も同じ厚さで、体部の中程が屈曲している。口縁は丸く納めてぼってりした感じ。底部外面に回転糸切り痕がある。しかし、掘立柱建物跡や溝跡から出土した中世上師器碗皿に見られたような、底部内面の指ナデ渦巻き痕はまったく見られない。これはSK04出土の中世上師器碗皿全てがそうであった。図26-1の中世上師器皿は13世紀前半の特徴を示す。^四

図26-2は中世上師器皿と思われる。底径4.5cmを測る。色調は白灰色を呈し、胎土は細かく滑らかで精良ではあるが砂粒を多く含む。底部はロクロからすっぽり切り放され、体部への立ち上がりは腰部がくぼんでアクセントになり、柔らかく、優美な曲線を描いて口縁に至るようである。底部外面には回転糸切り痕がある。底部の径が日だって小さく、体部が優美な曲線を描く13世紀前半の中世上師器皿の独特の形式のものと同じ特徴を示す。

図26-3は中世上師器皿の底部の破片である。復元底径5.2cmを測る。色調は淡く、赤みがかってベージュで、細かく滑らかな胎土中に若干砂粒を含む。底部外面に回転糸切り痕を残すが、底部内面には顕著な回転ナデの痕跡は見られない。底部からの立ち上がり、腰部が屈折したようになっている。底径が小さく、13世紀前半の特徴を示す。

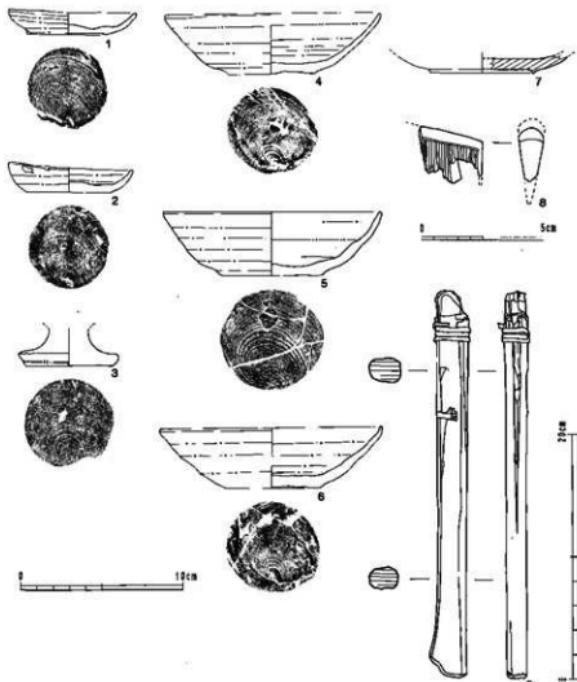


図32 渡橋沖遺跡SK09出土遺物実測図
(中世上師器・漆器S=1/3 楪S=1/2 柄S=1/4)

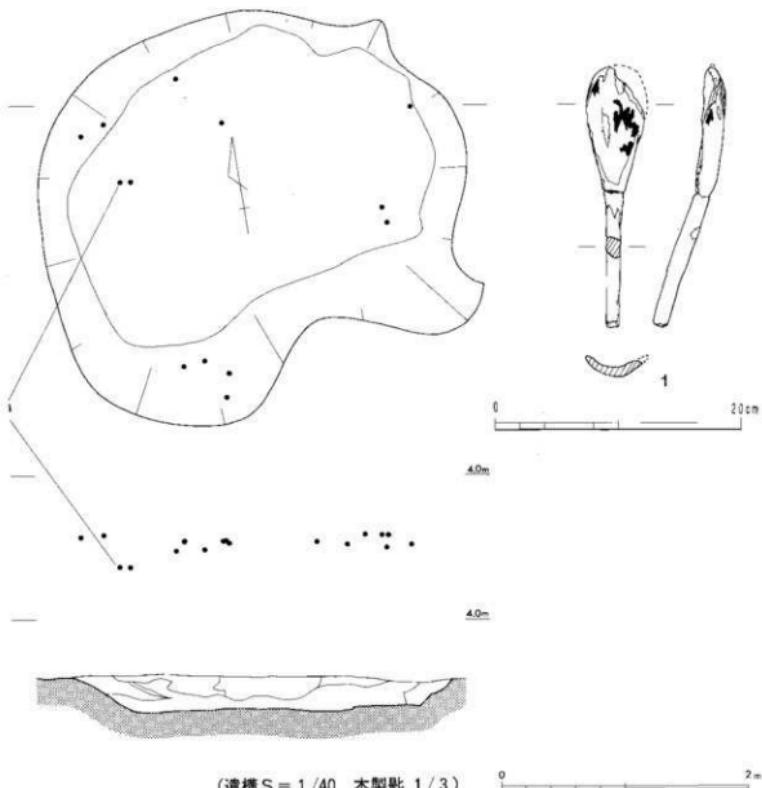


図33 渡橋沖遺跡 S K10遺構・出土遺物実測図

図26-4 も中世土師器碗である。底径5.4cm、色調は全体に満遍なく赤みがかったベージュの発色で、胎土は精良で微量の砂粒を含む。底部から若干のアクセントを持って立ち上がる。底部外面には回転糸切り痕を残すが、内面には顕著な回転ナデの痕跡は見られない。底径が小さく感じられ、13世紀前半の特徴を示す。

図26-5 は土師器系播鉢の片断である。復元口徑24cm、色調は、濃いベージュに発色した牛地に、内面全体から外面口縁近くまで、焼したような黒灰色の痕跡が、内面の深いカキ目、外面の浅いカキ目の間に残っている。内面は、斜め横方向に浅くカキ目を付けた後、口縁の約2cm下あたりに一刷毛真横にカキ目を巡らせて、最後に底に向けて一定間隔で深いカキ目を付けている。外面は口縁まで継ないし斜めに浅いハケ目がある。

この播鉢は、12世紀中までこの地においても流通した東播系の播鉢と、13世紀後半以降に流通する備前焼Ⅲ期の播鉢の間を埋める、現在のところ出雲地域でしか出土していない播鉢である。^{註10}

図26-6の木製品は、曲げ物の底か、何かの蓋であろうか。

図26-7はひどく痛んだ銭貨で、一部を欠いている。わずかに「景德元寶」と判読できる。直径1.9cm、重さ1.75g。景德元寶は中国北宋(960年~1279年)朝の真宗(997年~1022年)景德元年(1004年)初鋤。刻字体は真書。本銭と思われる。³³¹

S K04については遺物の時期がほぼ13世紀前半のところで挿している。その位置も掘立柱建物跡第1群として分類したS B12と組める位置にあり、時期も中世土器どうし一致を見ている。

同じく、土坑第1群として分類したS K08(図30 36ページ)は、平成9年度調査区SD05中央付近のすぐ北側、また、掘立柱建物跡第1群に分類したS B11のすぐ東側に位置している(図23 29ページ)。平面形はやや歪な円形をしており、長径1.2m、短径1.1m、深さ50cmを測る。底は砂質土に至り、地下水脈、伏流水の流路にあたる。若干の中世土器碗皿類の破片を得たが、図化できる状態のものではなかった。時期については不明である。位置も掘立柱建物跡第1群や掘立柱建物跡第2群、溝跡第2群とどれとでも組めるような位置にあるといえる(図23)。

土坑第1群に分類した2基の土坑のうち、S K04は、位置だけでなく遺物の時期も掘立柱建物跡第1群に分類したS B12と組むことが可能であることがわかった。

土坑第2群について

土坑第2群は次のように細分した。

第2群a(2-a): S K06

掘立柱建物跡第2群S B21、溝跡第2群SD05との位置関係、SK06そのものの平面形、規模から

第2群b(2-b): S K07 S K08 掘立柱建物跡群と水脈との位置関係から

第2群c(2-c): S K09 S K02 S K21 S K22 S K32 S K37

掘立柱建物跡第2群と溝跡第2群との位置関係と並列構成から

第2群d(2-d): S K12 SD11との関係から

土坑第2群aについて

土坑第2群aに分類したSK06(図28 34ページ)は掘立柱建物跡第2群に分類したS B21の南側、SD05に接している(図23 29ページ)。SK06、SD05ともに検出面においては切り合いかなく、一様に埋上が溜まっていた(巻末写真版12左下)ので、併存あるいは溝と連結して一定の機能なり景観を形成していた可能性を考えたい。

SK06の平面形は、くびれの太いひょうたん形を呈しており、長幅3.3m、短幅2.3~2.4m、くびれ部幅2m、深さ50cmを測る。底は砂質土に至り、地下水脈あるいは伏流水の流路にあたり、水が滲出して土坑の壁が流出した。

SK06からは、中世土器供膳具の碗、皿、柱状高台皿、中世須恵器甕、木製品の櫛、漆絵付櫛、

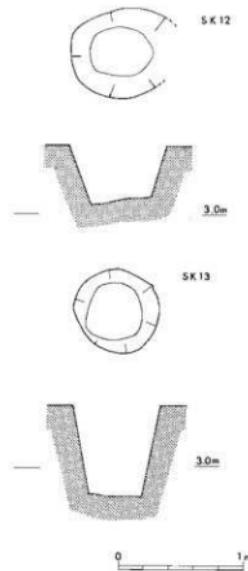


図34 渡橋沖遺跡SK12
SK13遺構実測図
(S=1/40)

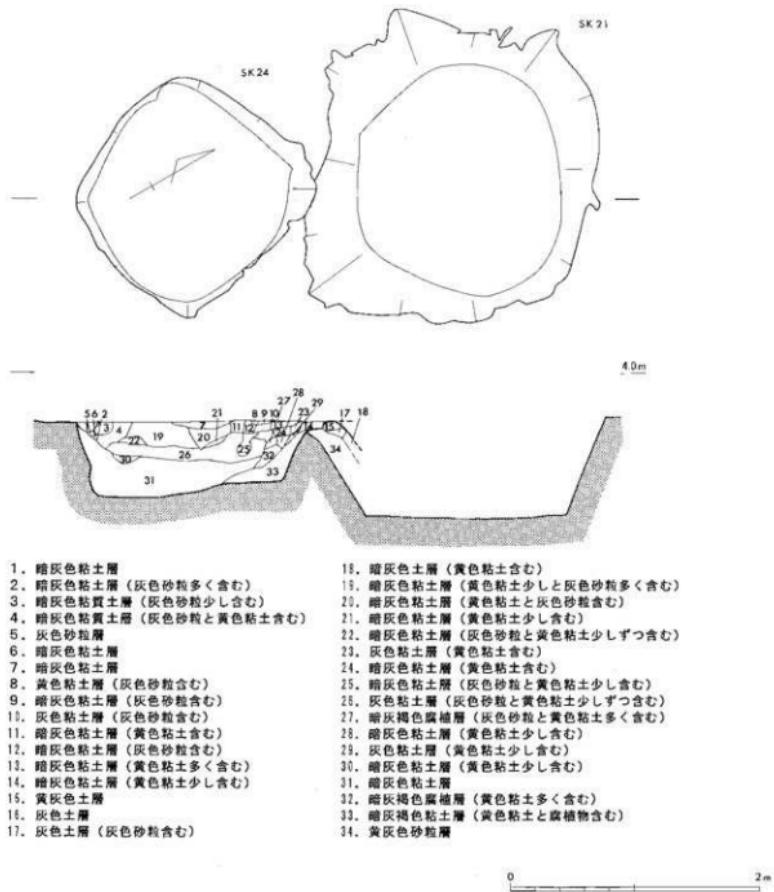


図35 渡橋沖遺跡SK21・SK24遺構・遺物出土状況実測図 (S = 1/40)

薄板、竹編み籠などが出土した。このうち、図化できたものは図29（35ページ）に挙げたものだけであった。

図29-1～5は中世土師器の皿である。1は復元口径7.2cm、底径3.4cm、器高1.7cmを測る。色調はベージュで、胎土は荒く、砂粒を非常に多く含む。底部外面から立ち上がった腰部が外に折れ、ふくらみを持って斜め上方に伸びる。体部の器肉は薄い。口縁端は外側斜めから回転ナデで押さえ、面を取って仕上げている。底部外面には回転糸切り痕があり、内部には弱々しくはあるが、回転指ナデ渦巻き痕が見られる。焼成前に底部外面からヘラ状の工具で押された部分があり、ひびが入って内側まで穿孔したようになっている。祭礼の供献か、もしくは失敗作の廃棄が考えられる。形式

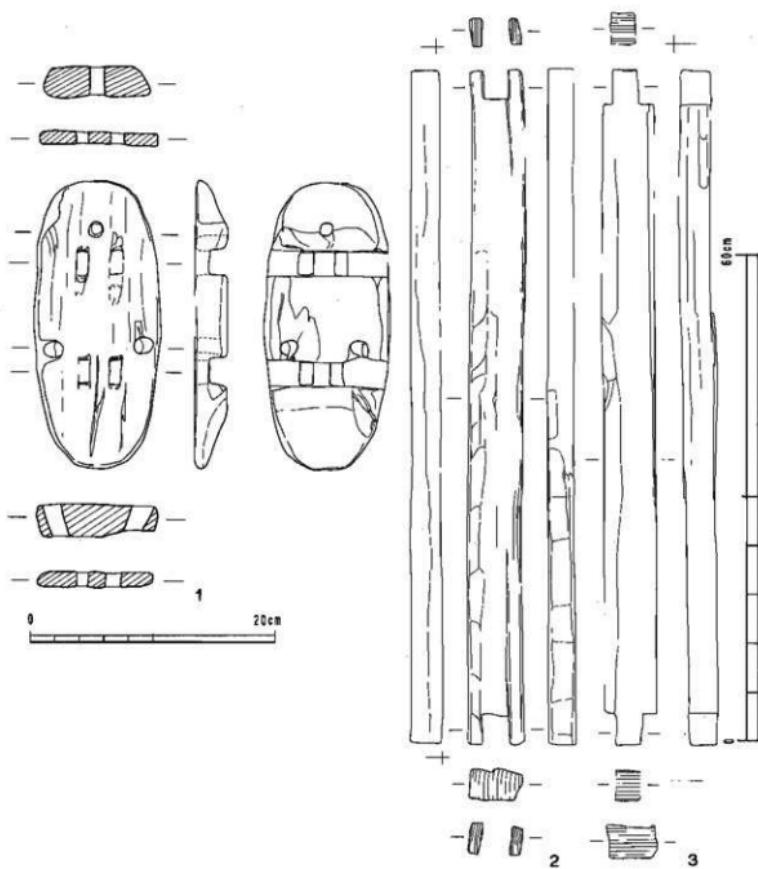


図36 渡橋沖遺跡SK21出土遺物実測図（建材S=1/6 下駄S=1/4）

としては12世紀中の鳥根中世Ⅱ期の特徴を示すが、底部内面の回転指ナメ渦巻き痕が13世紀中頃～後半にかけての時期的な要素であるとすれば、一考の余地ありと考えたいところである。

2も中世十師器の皿で、復元口径7.4cm、底径3.8cm、器高1.5cmを測る。色調は地の色は灰褐色で、内面は薄い灰色、外面は煤けたような黒灰色を呈している。胎土は1と同じように荒く、非常に多くの砂粒を含む。形式は、やはり、1と同じように底部外面からの立ち上がりが外に折れて、膨らんで口縁に至る。口縁は丸く納めている。器肉が薄い。底部外面に回転糸切り痕があり、内面には、これも微妙に回転指ナメ渦巻き痕を残す。穿孔とまではいかないが、底部内面中央をほじったような痕が見られる。色調の項目を除いて、1と共通の特徴が目立つ。

3も中世上師器の皿である。口径7.6cm、底径4cm、器高1.9cmを測る。色調は赤褐色の生地には

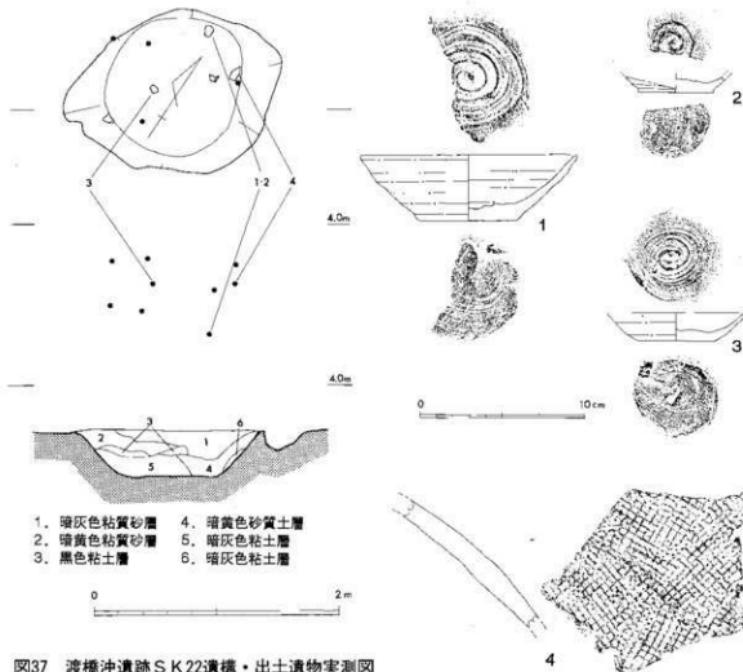


図37 渡横沖遺跡SK 22遺構・出土遺物実測図
(遺構S = 1/40 遺物S = 1/3)

んの一部分黄褐色の部分がある。胎土は荒く、非常に多くの砂粒を含む。焼成は堅緻に見える。形式は、底部から単純に立ち上がる、ほんのわずかの膨らみを持って口縁に至り、口縁を若干外に折り曲げている。口縁は図29-1ほどではないが、斜め上方から押さえて回転ナデして仕上げている。底部外面に回転糸切り痕が、また、内面にはほんの微かな回転指ナデ渦巻き痕がほの見える。島根中世Ⅲ期以前の特徴を示すものと思われる。

図29-4も中世土師器の皿である。復元口径8.2cm、復元底径4.8cm、器高1.5cmを測る。生地はページュである。胎土は細かく滑らかであるが、砂粒を少々含む。底部外面からの立ち上がりは器肉が厚く膨らむが、口縁近くは薄くなり、やや外反する。底部外面に回転糸切り痕、内面にはくっきりと回転指ナデ渦巻き痕が見られる。13世紀中頃から後半の特徴を示す。

図29-5も中世土師器皿である。口径7.8cm、底径4.8cm、器高1.5cmを測る。色調は黄褐色と赤みがかったページュとにまだらに発色している。胎土は荒く、多くの砂粒を含む。底部から立ち上がると若干くぼんで、その上からはやや膨らみを持って口縁に至る。口縁は体部の角度のままで、口縁端は丸く納めている。底部外面に回転糸切り痕、内面にはくっきりと回転指ナデ渦巻き痕が見られる。13世紀中頃から後半の特徴を示す。

図29-6・7は中世土師器の柱状高台皿である。6は底径5.6cmを測る。色調は灰褐色を呈しているが、断面からのぞく生地は赤褐色である。胎土は荒い均質で、細かい均質な砂粒を非常に多

く含む。柱状部は太く短く見える。底部のすぐ上で稜線を作つて屈折しており、底部に向かって「ハ」の字状に裾が広がっている。皿の底部内面から下に向かって穿孔しているが、深さは1.2cmだけで高台底部にまで貫通してはいない。底部外面には回転糸切り痕がある。13世紀中頃から後半の特徴を示す。

7は復元底径5.4cm、色調は赤褐色を呈している。胎土は荒く、砂粒を非常に多く含む。柱状部が太く短く見える。やはり底部の少し上で不明瞭ながら稜線を成して、底部に向かって裾が「ハ」の字状に開く。底部外面中央から上に向かって1cm穿孔しているが、皿底部内面まで至っていない。SK06から出土して図化できた柱状高台皿は、たまたまこの2点だけだが、穿孔の仕方に組み合わせの関係があるのだろうか。底部外面には回転糸切り痕が、内面には回転指ナデ渦巻き痕が見られる。13世紀中頃から後半の特徴を示す。

図29-9・10は中世土器の碗である。9は底の一部を欠いている。口径12.8cm、復元底径6cm、器高3cmを測る。色調は赤褐色から灰色を呈している。胎土は若干荒く多くの砂粒を含む。焼成は非常に堅緻である。形式は、底部から単純に屈折して立ち上がった後、ほんのわずかに内湾して口縁に至る。口縁はあまり円滑ではないが丸く納めようとしている。底部外面には回転糸切り痕が、内面には回転指ナデ渦巻き痕が見られる。底部形は大きいが、体部が広がって浅い。13世紀中頃から後半の特徴とその後の展開で見られるものとの特徴を併せ持つと思われる。

10は底部の破片である。底径6cmで色調は赤褐色を呈している。胎土は荒く、非常に多くの砂粒を含む。焼成は堅緻で、非常に重たい感じを受ける。底部が若干高台状になっており、やや丸みを持って斜め上方に伸びるように見える。底部外面には回転糸切り痕が、内面には回転指ナデ渦巻き痕が見られる。13世紀中頃から後半の特徴を示す。

図29-8は漆櫛（巻頭カラー写真図版2右上）である。復元口径15.5cm黒漆の上に赤漆で植物の枝、茎葉の意匠を描いている。

図29-13は木製の横櫛である。櫛櫛と思われる。基部の約半分と歯の大部分を欠いている。残存する基部の峰から歯先までは4.8cm、厚さは約1cmを測る。中央の歯元近くに梅か何かの花の意匠

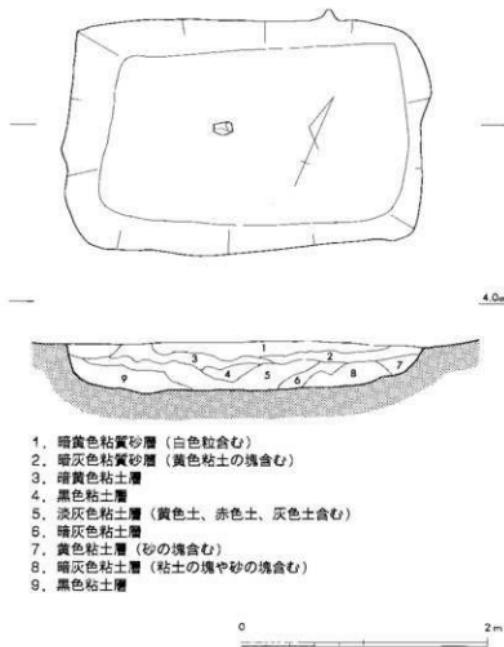


図38 渡橋沖遺跡SK25構造実測図 (S = 1/40)

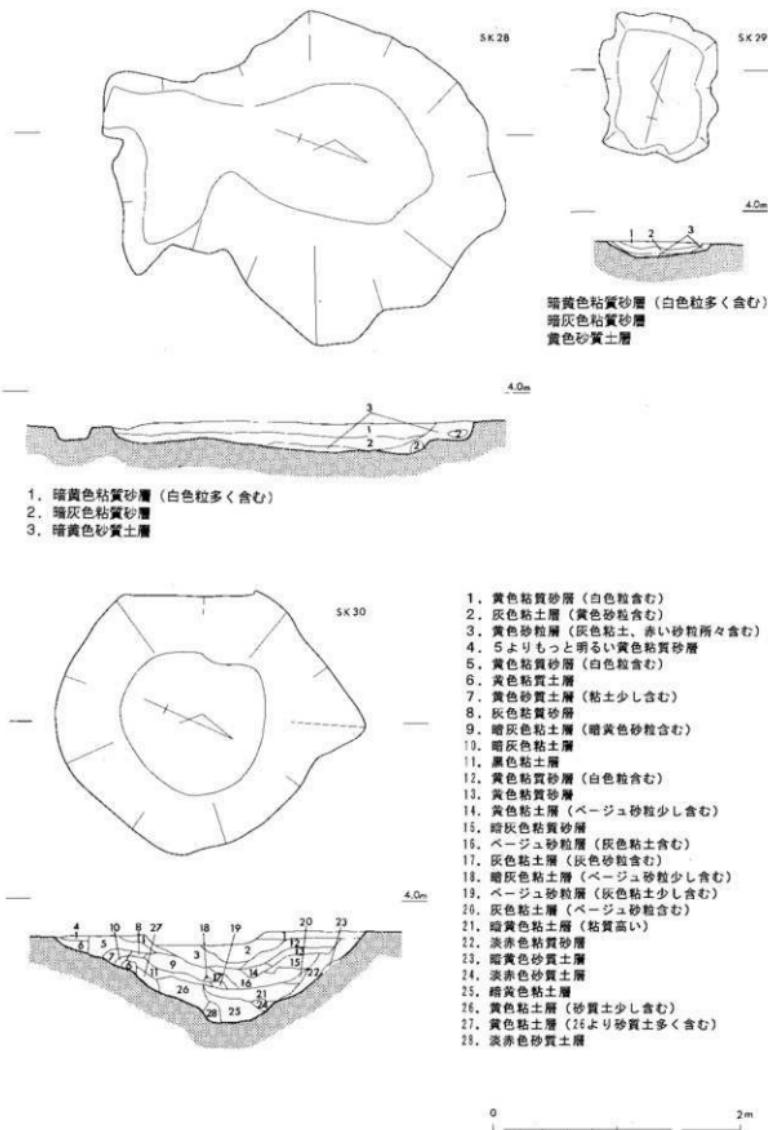


図39 渡橋沖遺跡 SK28・SK29・SK30遺構実測図 ($S = 1/40$)

を影響している。

図29-11は国産の無釉焼締陶器壺蓋類の破片である。内面は淡い青灰色、外面は灰褐色を呈している。胎土は荒く、非常に多くの細かい砂粒を含む。焼成は非常に堅緻である。七坑第2群cに分類したSK32から出土したもの（図43-49ページ）と同一個体を形成する可能性がある。

図29-19は中世須恵器壺の口縁である。復元口径33cmを測る。外面は黒灰色から明るい灰色、内側は灰色を呈する。口縁には内外ともに煤がこびり付いている部分がある。胎土は非常に荒く、多くの砂粒を含んでおり、白い微粒が非常に多く目立つ。焼成はあまり良くない。肩からは緩やかに屈曲して、低い口縁部を作っている。口縁端はわずかに肥厚し、上部は凹面を作っている。外面首のくびれから下、肩部にかけては4mmの正格子のタタキ目が付けられている。内面はナデ調整である。口縁や首、正格子のタタキ目などの形態的特徴から13世紀中葉の亀山焼^{四〇}か、13世紀中から14世紀前半にかけてのいぶし焼還元焰（須恵器）系陶器出雲型^{四一}の可能性が考えられる。

なお、溝跡第2群に分類したSD04から出土した中世須恵器壺胴部の破片についても同様と思われる。

図29-12・14-18は中世須恵器の肩部から胴部にかけての破片である。図29-19の中世須恵器壺の口縁から肩部にかけての部分と同一個体を形成する可能性のあるものもあると思われる。

土坑第2群aに分類したSK06から出土したもので、図化できたものは以上であった。時期的には、中世土師器の碗皿類の中には、若干古い物が含まれていたが、13世紀後半までのところで押さえられるものが多かった。

土坑第2群bについて

土坑第2群に分類したSK07（図27-33ページ）は、平成9年度調査区排水路よりも東側の北壁沿い、S B23の北側にあり、SK05と隣り合っている。（図23-27ページ）

SK07の平面形はヒョウタン形になっているが、東側の穴が検出面から下2層目までは後世に掘り込まれた擾乱部分のようである。深い部分は、長径1m、短径80cm、深さ65cmを測る。SK07が掘り込まれたこの砂質土層は固く締まってしっかりとした地盤ではあった。底はやはり、地下水脈伏流水の流路に当たっており、清水が噴出、流出していた。中世土師器の碗皿の破片と筒状木製品

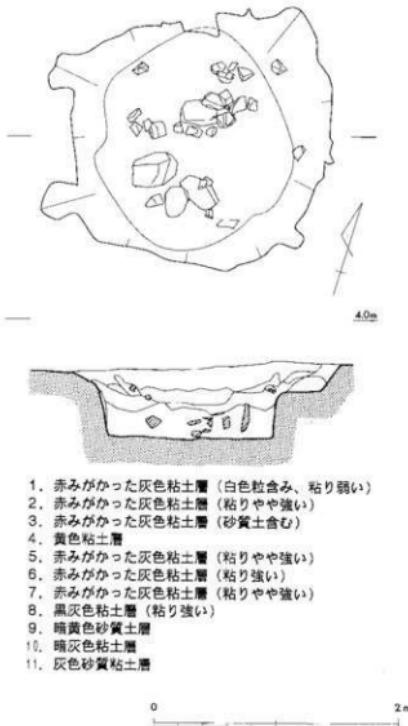


図40 渡橋沖遺跡SK31遺構・遺物出土状況実測図
(S = 1/40)

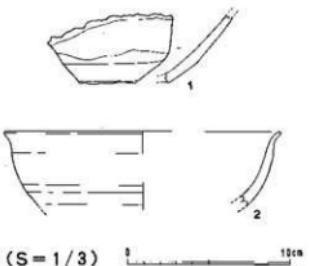


図41 渡橋沖遺跡SK31出土陶器実測図

が多く出土したが、そのうち図化できたのは図27に挙げた中世土師器皿1点のみであった。この皿は口径7.4cm、底径4.4cm、器高1.5cmを測る。色調は全体に灰褐色を呈している。胎土は非常に荒く、大小さまざまな砂粒を非常に多く含む。焼成もあり良くない。底部からあまり立ち上がりずに、地を這うように斜め上方に伸び、口縁断面は先細りで、丸く納めている。成形がまことに、歪んでいる。何かを注いでもいくらも入る代物ではない。成形の痕跡が内外ともにそのまま残っている。底部外面に回転糸切り痕があり、内面には回転指ナデ渦巻き痕が見られる。気は引けるが13世紀中頃から後半の特徴を示していると考えたい。

上坑第2群bとしても分類したSK08(図30 36ページ)は、40ページで述懐したとおりである。
土坑第2群cについて

土坑第2群cとしてはSK09、SK02、SK21、SK22、SK32、SK37を括した。

SK09(図31 37ページ)は平成9年度調査区の排水溝より西側の調査区の北東隅にある(図23 29ページ)。排水溝などに切られていって、平面形など全容を知ることはできなかった。残存長幅3.3m、発掘短幅1.8m、深さ65cmを測る。このSK09からは中世土師器の供膳具、木製品などが出土している。その中で図化できたのは図32(38ページ)に挙げたものだった。

図32-1・2は中世土師器の皿である。1はほぼ完形で、口径7.4cm、底径5cm、器高1.5cmを測る。色調は全体ベージュで、外側のほんの一部に黄褐色の部分がある。胎土は非常に精良で、砂粒を極微量含む。白粒が所々にのぞく。体部は丸みを持っている。口縁に至るまではほとんど厚みに変化なく、口縁は丸く納めている。底部外面は回転糸切り痕を残し、内面は同心円状の回転指ナデ痕を残す。今まで見てきたような渦巻き状の痕跡ではない。13世紀前半の特徴を示すと思われる。

2は完形で口径7.8cm、底径5.2cm、器高1.8cmを測る。色調はベージュと黄褐色のまだらである。胎土は細かく滑らかで砂粒を少し含む。白粒が所々にのぞく。形式は1と同様であるが少し歪んでいる。1と同様に底部外面は回転糸切り痕を残し、内面は同心円状の回転指ナデ痕を残す。13世紀前半の特徴を示すと思われる。

図32-3は中世土師器の柱状高台皿の柱状高台の部分である。底径は5.4cm、張出し部の最大径は6.2cmを測る。色調はアイボリーである。胎土は精良であるが若干砂粒を含む。白粒が所々にのぞく。底部より少し上に稜線が通り、底部に向けてそばめていて断面が逆「ハ」の字状になっている。この点、SK06(図29-6・7 35ページ)やピット611(図46-1 52ページ)出土のものと異なる点である。13世紀前半の特徴を示す。

図32-4~6は中世土師器の楕である。4は口縁の半分近くを欠いている。口径13.2cm、底径5.4cm、器高3.7cmを測る。色調は全体に、断面までもが紫灰色で独特の発色をしている。胎土は精良であるが、砂粒を多く含む。白粒が目立つ。体部は底部から緩やかに立ち上がり、口縁もわずかに内湾して終わる。底径は割と小さく、器肉は底部も体部も薄く、全体に軽い。底部外面に回転糸切り痕を残す。内面には確かに同心円状の回転指ナデ痕があるが、意識してそのような痕跡を残さぬように納めているように見える。このような傾向は、この3個の中世土師器楕に共通してみられる

技法上の特徴と言える。

13世紀前半の特徴を示す。

5は完形で口径13.6cm、底径5.4cm、器高4cmを測る。色調は内面は淡いベージュ、外面は淡い灰色から黄褐色、淡いベージュのまだらである。胎土は精良であるが、砂粒を多く含む。白粒が目立つ。体部は内湾しながら緩やかに立ち上がり、口縁もさらに若干内湾して終わっている。断面にはロクロ成形の遠心力によって生じた波が如実に表われている。底径小さく、器肉は薄く、全体に軽い。底部外面には回転糸切り痕を残す。13世紀前半の特徴を示す。

6も完形で口径13.7cm、底径5.4cm、器高3.8cmを測る。色調は、外面は淡い灰色ほんの一部に赤みがかったベージュの部分がある。内面は淡い黄褐色を呈し、内外面とも半分煤がこびり付いてい

る。形式は4と同様であるが6のほうが口縁の内湾が顕著で、器肉がやや厚い。底径小さく、全体に軽い。底部外面には回転糸切り痕を残す。13世紀前半の特徴を示す。

図32-7は黒漆碗の底部である。2mmほど高台を削り出している。復元高台径6.4cmを測る。

図32-8は横櫛の梳櫛と思われる。耳にかけての部分である。

図32-9はハナ付鉈の柄と思われる。長さ36.6cm、厚さ2.4~2.5cm、幅1.7~1.9cm。差し込まれた茎が折れて残っている。差し込み部を平らで細い皮紐で巻いている。柄尻は図のように隆起させている。十坑第2群cに分類したSK09で図化できた中世十脚器は13世紀前半の様相を呈していた。時期的な様相から見れば土坑第1群に分類するべきかも知れない。

土坑第2群cとして分類したSK02(図24 30ページ)は、SD21の西端の北側SB21の北側S

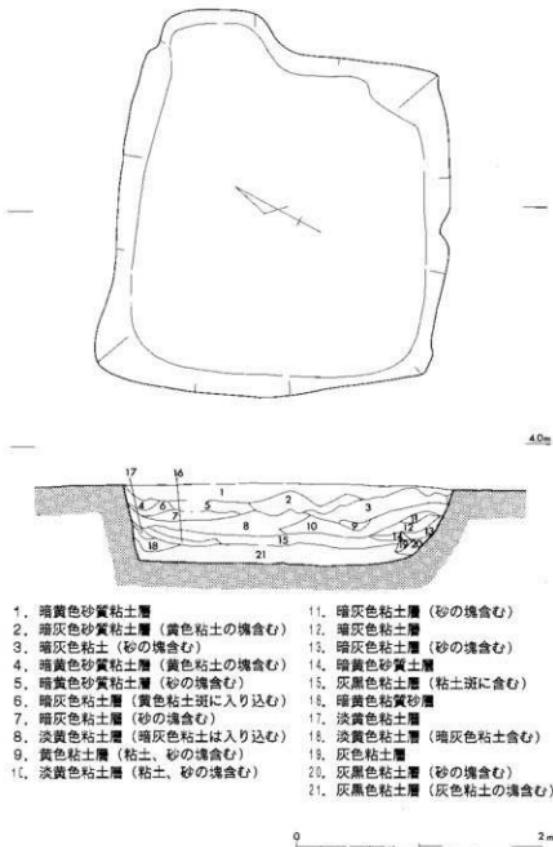


図42 渡橋沖遺跡SK32遺構・遺物出土状況実測図 (S = 1/40)

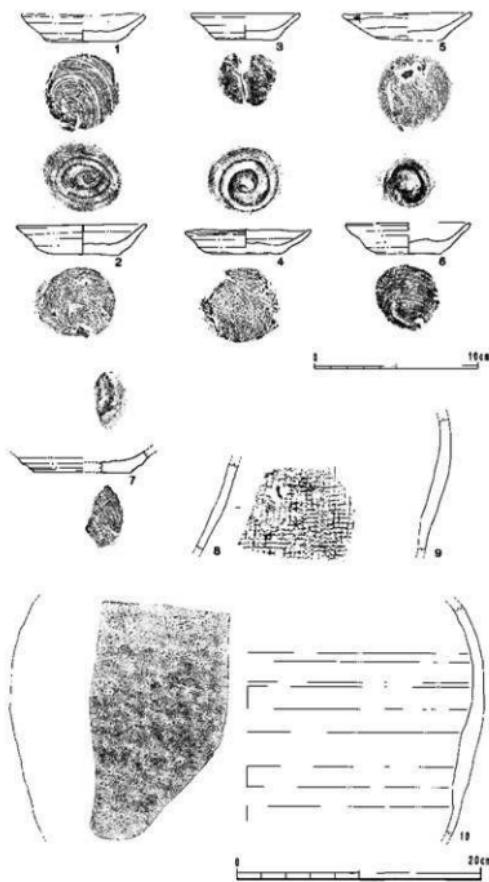


図43 渡橋沖遺跡SK32出土遺物実測図
(中世土師器皿S=1/3 陶器壺壺類S=1/4)

たSK24に切られている。平面形は歪な隅丸方形で短辺2.5m、長辺2.8m、深さ80cmを測る。底は砂質上に至り、地下水脈、伏流水に当たる。この土坑からは、中世土師器供膳具の破片、中世須恵器の破片、石、下駄、建材が出土した。このうち岡化できたのは図36(42ページ)に挙げた下駄と建材であった。1は差歎下駄の台部である。長さ23.5cm、幅10.2cm、厚さ2.7cmを測る。歎は出土しなかった。前緒孔は中央より若干左に付いている。前後の歎を差す隣孔が2孔ずつ開けられている。指跡の窪みから右足用であることがわかる。材質は針葉樹と思われる。2・3は凸と凹で組み合う建材と思われる。2は長さ82.6、幅6.5cm、厚さ3.1cm、3は長さ82.6cm、幅6.3cm、厚さ3.9cmを測る。

上坑第2群cに分類したSK22(図37 43ページ)はSK21の東、SD24とSD21の分岐部の北

B23の東に位置する(図23 29ページ)。平面形は歪な円形で短径1.9m、長径2.2m、深さ65cmを測る。底は砂質土層に至り、水が滲出する。この土坑からは中世土師器の壺壺類が出土している。そのうち、岡化できたのは、図24に挙げた中世土師器の皿2枚であった。1は完形で口径7.6cm、底径4.6cm、器高1.5cmを測る。色調は赤みがかってベージュで、胎土はやや荒く、砂粒を多く含む。白粒が目立つ。平面形はやや歪んでいる。体部は底部からくっきりと立ち上がり、やや先細りながら斜め上方に伸びる。口縁は丸く納めている。底部外面には回転糸切り痕を残し、内面には回転指ナテ渦巻き痕を残す。2は口径8.1cm、底径4.8cm、器高1.4cmを測る。色調、胎土、成形技法など1と同様である。形態的特徴も類似しており、1よりもやや器内が薄い。1・2とも13世紀中期から後半の特徴を示す。

上坑第2群cとして分類したSK21(図35 41ページ)は、平成10年調査区E区の北西隅、SD21とSD25の分岐部の北側(図23 29ページ)で検出された。上坑第7群とともに分類し

にある(図23 29ページ)。平面形は歪な卵形をしている。長径1.8m、短径1.3m、深さ38cmを測る。底は砂質土に至り、地下水脈に当たる。この土坑からは中世土師器の破片と中世須恵器の破片が出土した(図37)。1は中世土師器の碗である。半分を欠いている。色調はアイボリー、胎土は荒く、不揃いの砂粒を非常に多く含む。焼成は不良である。体部は底部から屈折して立ち上がり、斜め上方に伸びて口縁に至る。口縁端は丸く納める。底部外面には回転糸切り痕を残し、内面には回転指ナデ渦巻き痕が残している。13世紀中頃から後半の特徴を示すと思われる。2は底部片で、环か皿か判然としない。色調、胎土、成形技法、焼成などは1と同様と思われる。3は中世土師器の皿である。色調は黄褐色で所々に赤みがかったベージュ

の部分がある。胎土荒く、砂粒を少し含む。体部は底部から若干の膨らみを持って立ち上がり、先細りながら口縁に至る。口縁端は丸く納める。底部外面には回転糸切り痕を残し、内面には回転指ナデ渦巻き痕が残している。また、内外にタール様ものが染みついた痕跡があるので、灯明皿として使用された可能性も考えられる。13世紀中頃から後半の特徴を示すと思われる。4は中世須恵器の壺胴部片と思われる。溝跡第2群のS D04、土坑第2群cのS K06から出土した中世須恵器と同様龜山焼か出雲型の可能性があると思われる。ⁱⁱⁱ S K22の遺物も13世紀中頃から後半の様相を呈していると思われる。

七坑第2群cに分類したSK32(図42 48ページ)は平成10年度調査区E区のS D23が屈曲して西行する南側SK37の東で検出した(図23 29ページ)。平面形は隅丸方形(やや突出部あり)で1辺2.7m、深さ66cmを測る。底は砂質土層に至り、地下水脈、伏流水に当たる。

この土坑からは中世土師器と中世須恵器、陶器が出土している。そのうち、図化できたものは図43(49ページ)に挙げたものであった。1~6は中世土師器の皿である。1・2・4・6は色調が淡い灰色から淡いベージュで底部外面に回転糸切り痕を残し、内面には回転指ナデ渦巻き痕を残している。3・5には内面の渦巻き痕がなく色調も赤みがかったベージュであった。8は中世須恵器壺胴部の破片である。溝跡第2群のS D04、土坑第2群cのS K06、S K22から出土した中世須恵器と同様龜山焼か出雲型の可能性があると思われる。9・10は国産無釉焼締陶器壺の壺胴部片である。外面は茶褐色から暗い灰褐色、内面は青灰色を呈しており、胎土に非常に多くの荒い砂粒を含む。図12-3(18ページ)の口縁やSK06から出土した図29-11(35ページ)と同一個体を形成する可能性がある。中世土師器皿、中世須恵器壺片は13世紀中頃から14世紀の様相を呈している。

土坑第2群cに分類したSK37(図45)は平面卵形で長径2.4m、短径1.9m、深さ54cmを測る。中世須恵器の环(完形)と壺片が出土した。环は口径11.4cm、底径6cm、器高3.7cmを測る。色調は青灰色から赤紫色、黄色(カナケによる変色か?)を呈している。胎土は荒く、微細な砂粒を非常に多く含む。焼成は堅緻である。体部は立ち上がって斜め上方に単調に伸びて口縁に至る。口縁端は丸く納めている。外面はケズリの痕跡を消そうともしていない。やや重んでいる。底部外面に回

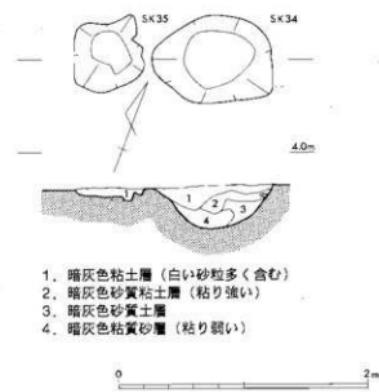


図44 渡橋沖遺跡SK34・SK35遺構実測図
(S = 1/40)

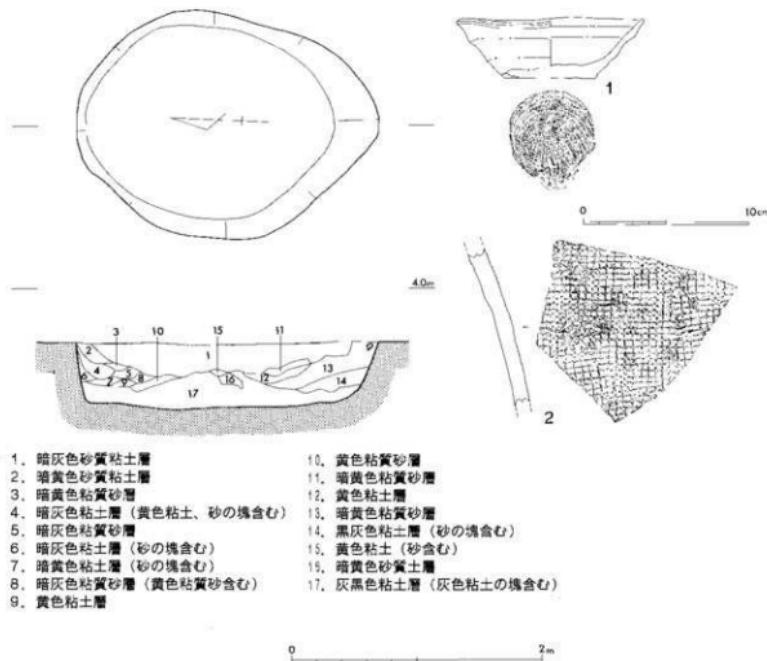


図45 渡橋沖遺跡 S K37遺構・出土遺物実測図（遺構 S = 1/40、遺物 1 / 3）

転糸切り痕を残し、内面には回転指ナデ渦巻き痕を残している。12世紀以前のものかも知れないが、成形技法はこれまで見てきた13世紀中頃から後半にかけての中世土師器と同様と思われる。壺片は S D04、S K06、S K22、S K32と同様のものと思われる。

土坑第2群cの中では、S K09が13世紀前半で終わっている可能性を示し、S K32が14世紀代まで統く可能性を示している。その他は、概ね13世紀後半の年代観が得られた。

土坑第3群とその他の土坑について

土坑第3群に分類したS K10（図33 39ページ）はS D03と接する（図23 29ページ）。平面形はそらまめ形をしており、長径3.8m、短径3.1m、深さ25cmを測る。ほかの土坑に比較して浅い。砂質土層に掘り込まれておらず、底は伏流水に当たる。中世土師器の細かな破片と大きな木製の匙形の杓子が出土した。長さ21.7cm、約の長さ10.2cm、最大幅4.6cm、柄の太さ1cm、厚さ1.6cmを測る。

土坑第7群として分類したS K24は土坑第2群cに分類したS K21を切っている。この土坑からは土器や陶磁器などの遺物はほとんど出土しておらず、埋土の中に掘立柱建物の根石に使用していたと見られる石が多く出土した。近世以降の水田や畑作を営む際にまとめて廃棄したことが考えられる。このような傾向は、同じく土坑第7群に分類したS K31に一層顕著に表われている（図40 46ページ）。S K31からは近世のものと思われる陶器が出土している。

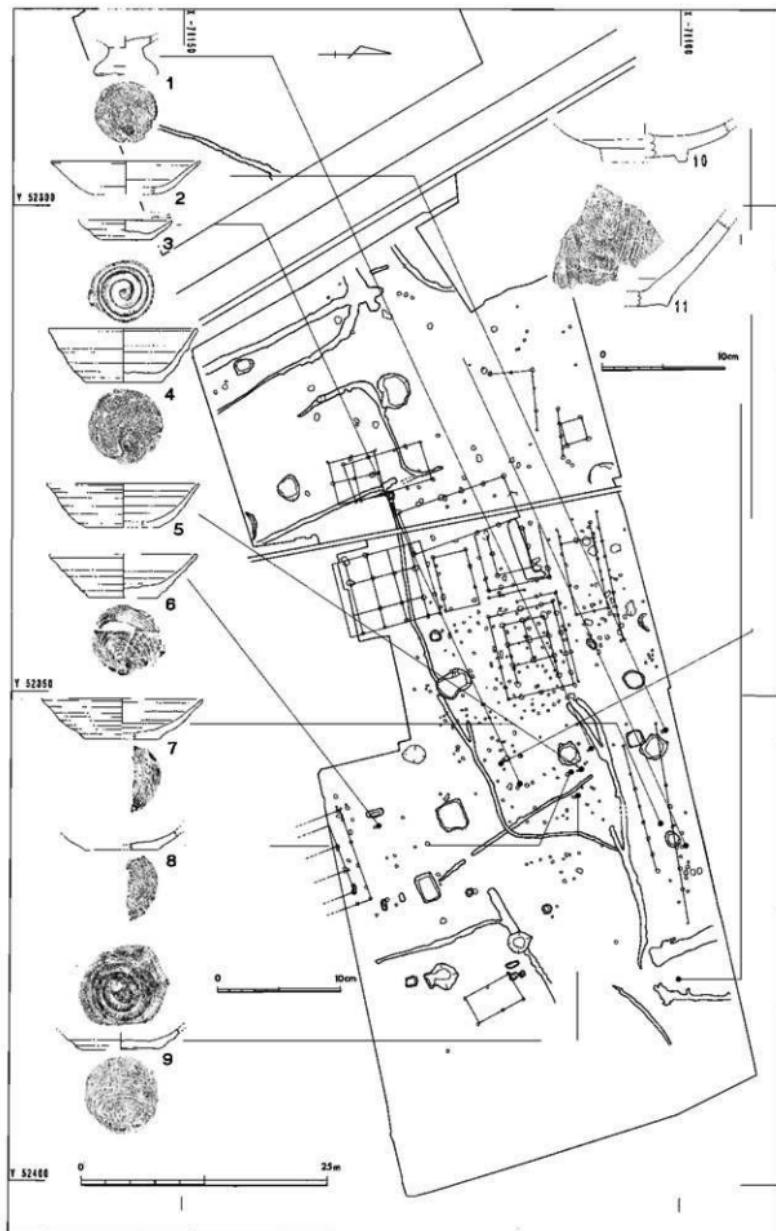


図46 渡橋沖遺跡その他の遺物出土位置（全体図S = 1/500 遺物S = 1/4）

第3節 発掘調査成果のまとめ

渡橋沖遺跡の遺構の組み合わせと変遷の可能性を探ると以下のようになると思われる。

(S B02) → 挖立柱建物跡第1群 → 挖立柱建物跡第2群 → 挖立柱建物跡第3群

溝跡第2群 → 溝跡第3群

上坑第1群 → 上坑第2群 → 上坑第3群

(13世紀前半) (13世紀中頃～後半) (13世紀後半～14世紀)

渡橋沖遺跡では、今回の発掘調査において挖立柱建物跡や溝跡、土坑など鎌倉時代の集落の一角の変遷を検出することができた。ここまで記述で触れずにきたが、この一角が、集落の中でどのような機能を果たしていたのかということについて考えるとき、蔵小路西遺跡の鉢跡に比較して極端に少ない遺物の出土量がポイントとなると思われる。これについては、中近世以降の耕地造成のことも考慮しなければならないが、機能を反映したものとすれば、當時人が住むことのない施設であったと考えたい。石製五輪小塔など特徴的な遺物の出土も注目される。中世の四絆遺跡群の発掘調査例としては矢野遺跡と蔵小路西遺跡であるが、時期は矢野遺跡が14～15世紀前半、蔵小路西遺跡が12世紀後半～15世紀前半である。これらの遺跡で検出された遺構群は渡橋沖遺跡の遺構群と集落を形成しており、渡橋沖遺跡は集落の西限を示している可能性がある。渡橋沖遺跡は調査区の南北に広がっている。

註

- 1 ①広江耕史 「島根県における中世土器について」『松江考古』第8号 松江考古学談話会 1992
②八嶋 興 「山陰における中世土器の変遷について」『中世土器の基礎研究会』日本中世土器研究会 1998
③間野人丞他 「蔵小路西遺跡」一般国道9号出雲バイパス発掘調査報告書2－ 島根県教育委員会 1999
- 2 永井久美男 「日本出土銭鑄造」1996年版 兵庫埋蔵鉄調査会 1996
藤島達朗・野上俊幹 「東方年表」 半楽寺古店 1955
- 3 嶋谷和彦 「中世の“地鎮め”と錢貨」『山十錢貨』第7号 山十錢貨研究会 1997
なお、作出する中世土器がすべて細片であったため、輪などのか皿なのか判別することはできなかった。
- 4 山本信夫 「III-11 [2] 中世前期の貿易陶磁器」『概説 中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会編 真陽社 1995
長谷部泰輔・今井 敦 「日本出土の中国陶磁」 平凡社版 中国の陶磁 第12巻 1995
- 5 註1と同じ。特に③の成果から。
- 6 日野一郎 「III 石塔」『新版 仏教考古学講座』第3巻 塔・塔婆 雄山閣 1984
この石製五輪小塔については、元興寺文化財研究所人文・考古研究室長藤澤典彦氏に種々御教示いただき、ほか、次の書を参考にさせていただいた。
石田茂作 「佛教考古学論叢」 四 佛塔編 思文閣 1977
間野大水 「中世石像物の調査方法について—五輪塔、宝篋印塔を中心に—」『米待ストーン研究1』 モニュメント・ミュージアム米待ストーン 1998
- 7 近藤 正 「大田市南八幡宮の鐵塔と經筒について」『島根県文化財調査報告』 第一集 島根県教育委員会編 1960
- 8 間野人丞他 「蔵小路西遺跡」一般国道9号出雲バイパス発掘調査報告書2－ 島根県教育委員会 1999
以後特に断らない限り、中世土器供器具、廻理具の年代は蔵小路西遺跡の年代観に準拠した。
なお、この報告においては「13世紀前半」は鎌倉時代の創始期を意識しており、12世紀末(1180年代以降)も含めて考えたい。
- 9 註8と同じ。
- 10 註8と同じ。
- 11 註2と同じ。
- 12 岡山県教育委員会 「亀山遺跡」「山陽自動車道に伴う発掘調査3」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告69 1988
- 13 萩野繁春 「中世西日本における貯蔵容器の生産」『考古学雑誌』 第78巻 第3号 1993
- 14 註12、註13と同じ。

写 真 図 版

卷頭写真図版目次

- 卷頭写真図版 1 渡橋沖遺跡空中撮影写真（合成）
- 卷頭写真図版 2 渡橋沖遺跡溝跡（S D01・S D02）出土凝灰岩製五輪小塔
渡橋沖遺跡出土中世土師器集合
- 渡橋沖遺跡溝跡（S D05・S D23・S D25）出土青磁
- 渡橋沖遺跡土坑（S K06）出土漆器椀

巻末写真図版目次

- 図版 1 渡橋沖遺跡掘立柱建物跡 1
- 図版 2 渡橋沖遺跡掘立柱建物跡 2
- 図版 3 渡橋沖遺跡溝跡他 1
- 図版 4 渡橋沖遺跡溝跡他 2
- 図版 5 渡橋沖遺跡溝跡他 3
- 図版 6 渡橋沖遺跡溝跡他 4
- 図版 7 渡橋沖遺跡溝跡他 5
- 図版 8 渡橋沖遺跡溝跡他 6
- 図版 9 渡橋沖遺跡掘立柱建物跡 根石、遺物出土状況 1
- 図版10 渡橋沖遺跡掘立柱建物跡 根石、遺物出土状況 2
- 図版11 渡橋沖遺跡掘立柱建物跡 根石、遺物出土状況 3
- 図版12 渡橋沖遺跡土坑 1
- 図版13 渡橋沖遺跡土坑 2
- 図版14 渡橋沖遺跡土坑 3
- 図版15 渡橋沖遺跡土坑 4
- 図版16 渡橋沖遺跡 ピット遺物出土状況 1
- 図版17 渡橋沖遺跡 ピット遺物出土状況 2
- 図版18 渡橋沖遺跡 ピット遺物出土状況 3
- 図版19 渡橋沖遺跡遺物 1 中世土師器、陶器
- 図版20 渡橋沖遺跡遺物 2 錢貨、中世土師器、青磁、陶器
- 図版21 渡橋沖遺跡遺物 3 陶器集合、中世土師器集合
- 図版22 渡橋沖遺跡遺物 4 差歯下駄、建材、柱根
- 図版23 渡橋沖遺跡遺物 5 木製品（装身具、漆器、食器、道具）



SB01 (南から)



SB02, SB12 (北から)



SB21, SB22 (西から)



SB61 (東から)



SB11 (北から)



SB71 (南東から)



SB61 (東から)



SD02 (北から)



SD01 (北から)



SD01, SD02 (北から)





SD71（東から）



SD71（東から）



SD23（西から）



SD05（西から）



SD21、SD22、SD25
(西から)



SD21、SD22、SD25
(西から)



SD22、SD25
(西から)



SD22、SD25（西から）



SD22、SD25（東から）



SD21、SD22、SD24（東から）



SD21（東から）



SD21 (東から)

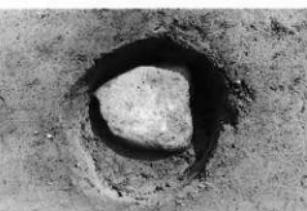


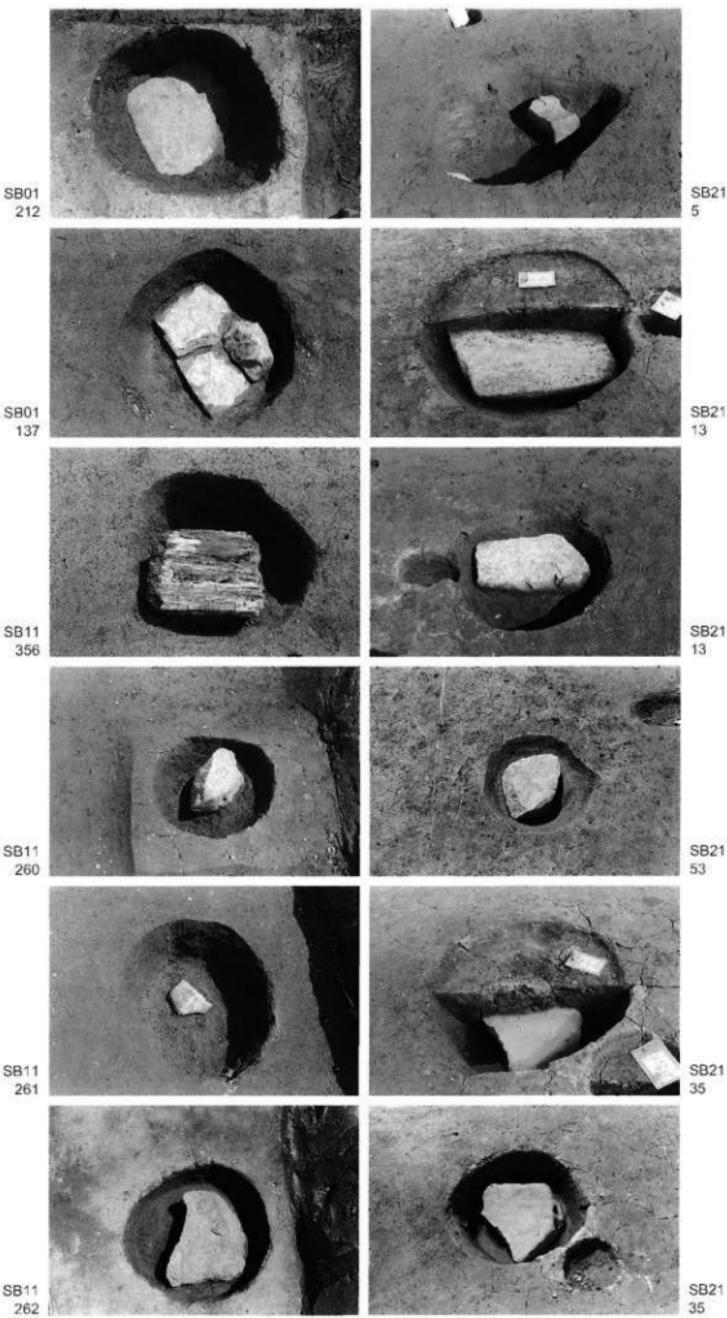
SD21 (南から)



SD31, SD32 (南から)

写真図版 9







SB21
39



SB21
240



SB21
39



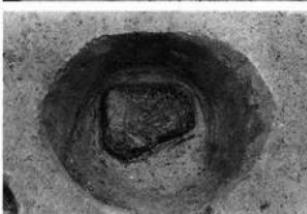
SB21
240



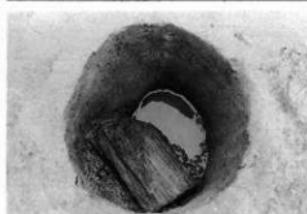
SB21
241



SB21
64



SB21
241



SB21
239



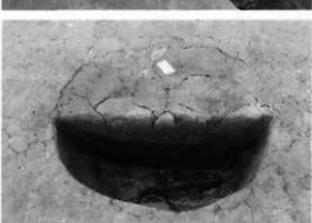
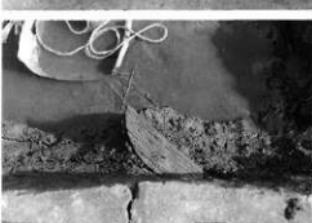
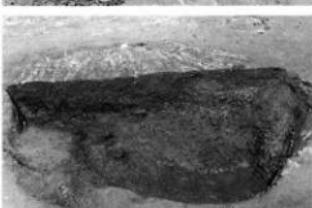
SB21
46



SB21
44



SB61
630





SK06
柱状高台皿出土状況



SK09
土器器出土状況



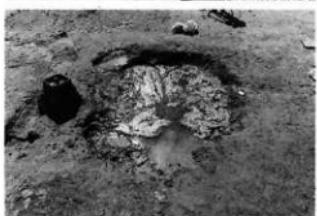
SK09
刃物の柄出土状況



SK09



SK24



SK10



SK21 (右)
SK24 (左)



SK10
遺物出土状況



SK22



SK21



SK22



SK21 (上右) と
SK24 (下左) の
切り合い関係



SK25



SK21



SK25



SK28. SK29



SK32



SK28



SK32



SK30



SK36



SK30



SK36



SK31



SK37



SK31



SK37



P508 半裁 土師器榪出土状況



P508 土師器榪出土状況



P537
柱根出土状況



P626
土師器出土状況



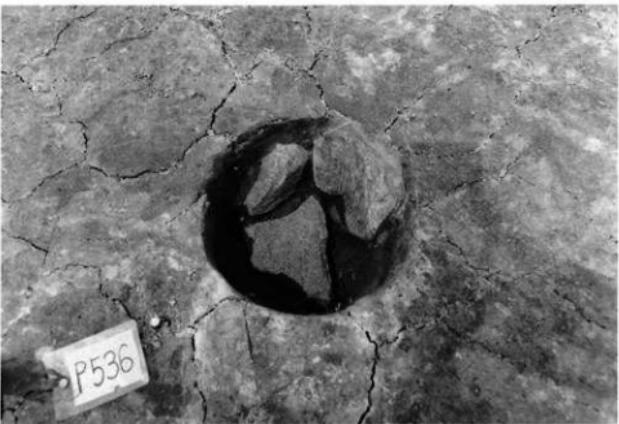
P626
柱根出土状況



P565
土師器出土状況



P611
土師器出土状況



P536
石出土状況



12-2



12-1



12-3



22-8



22-7



46-6



29-7



29-6



46-1



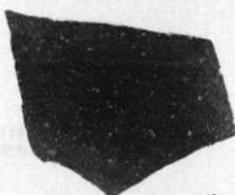
29-19



29-9



32-3



46-9



32-5



32-6



32-4



37-1



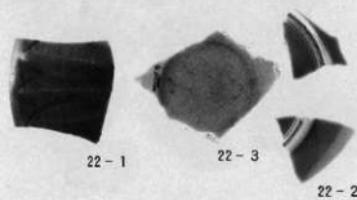
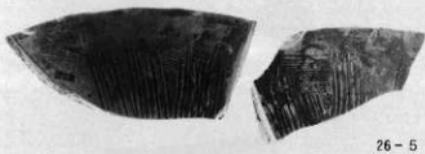
45-1



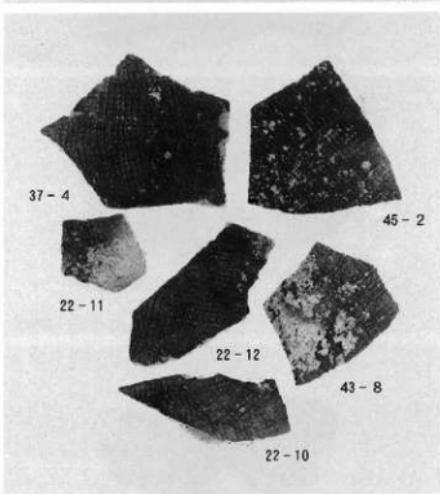
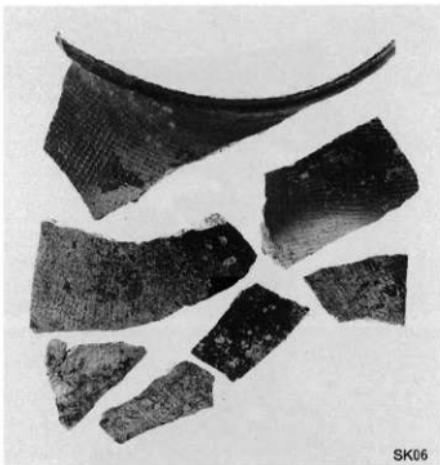
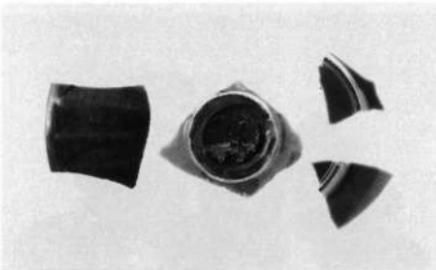
43-10



SK04



SK06





SK05



柱状高台皿



SK06



漆蓋類



SK09



椀



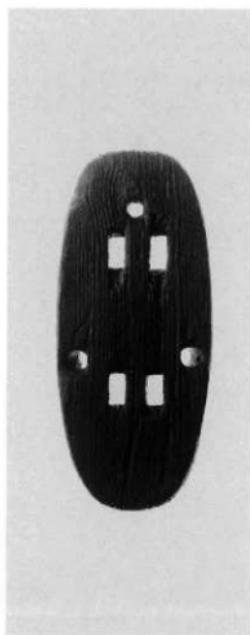
皿・擂鉢



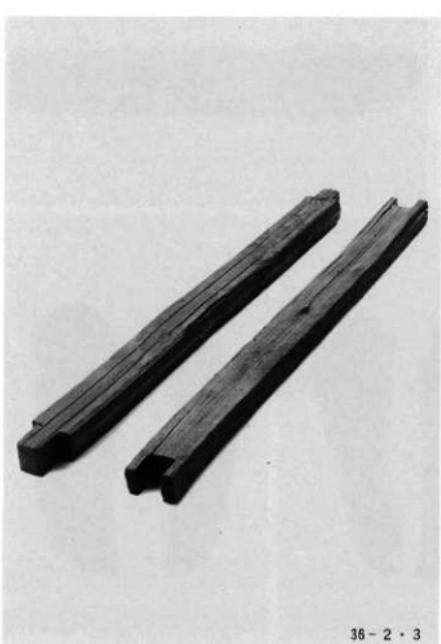
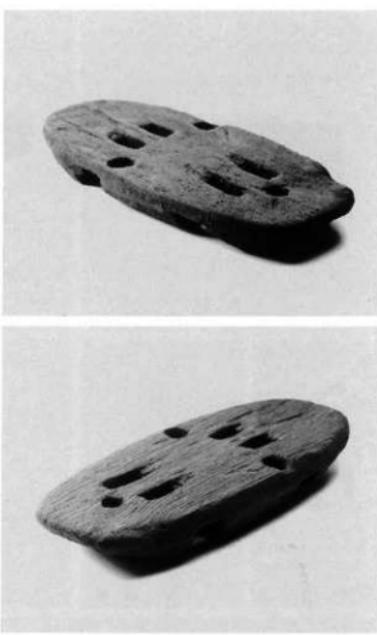
椀凹類



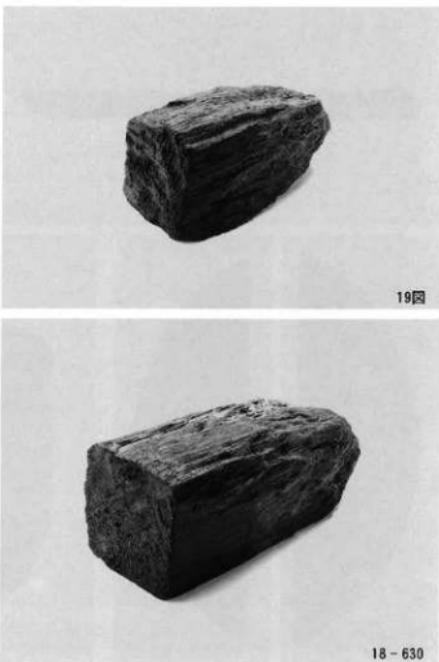
椀凸類



36-1



36-2+3



18-630



29-13



33図



32-8



29-8



32-9



26-6



32-7



報告書抄録

フリガナ	ワタリハシオキセキ					
書名	渡橋沖遺跡					
副書名	一般国道9号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告3					
巻次	3					
シリーズ名	一般国道9号出雲バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告					
シリーズ番号	3					
編著者名	大庭後次 足立克己 間野大丞					
編集機関	島根県教育庁文化財課 島根県埋蔵文化財調査センター					
所在地	〒690-0131 島根県松江市打出町33番地 TEL 0852-36-8608㈹					
発行年月日	西暦 1999年3月31日					
フリガナ	フリガナ	コード	北緯	東經	調査期間	調査面積 m ²
所収遺跡名	所在地	市町村 遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″		調査原因
渡橋沖	島根県出雲市 渡橋町	322032	35° 21' 59"	132° 44' 34"	19970618- 19971012 19980415- 19970703	5,600 道路建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
渡橋沖	集落跡	中世	獨立柱建物跡………12棟 土坑………31基 溝跡………18条 柵列・塙跡………8列	木製品 建築部材 差歛下駄 装身具 調理具 道具 中世土器 青磁 陶器 凝灰岩製五輪小塔	碗皿類 碗皿類 碗皿類 調理具	

渡橋沖遺跡

一般国道9号出雲バイパス建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告 3

1999年3月

編集 島根県教育委員会

発行 建設省松江国道工事事務所

印刷 御黒潮社